劔崎遺跡

1986

石川県立埋蔵文化財センター

劔崎遺跡

石川県立埋蔵文化財センター

劔崎遺跡

目　次

頁

例　言 …… v

第1章　序　説 …… 1

第2章　劔崎遺跡の環境 …… 2

第1節　位置と地理的環境 …… 2

第2節　歴史的環境 …… 3

第3章　遺構と遺物 …… 7

第1節　概　要 …… 7

第2節　各　説 …… 10

1　墓地跡 …… 10

2　土坑・溝状遺構・ピット …… 18

3　包含層出土土器 …… 24

第4章　考　察 ―墓地跡の評価をめぐって― …… 27

第1節　はじめに …… 27

第2節　周溝をもつ中世墓について …… 27

第3節　五輪塔の変遷について …… 31

第4節　被葬者の問題 …… 36

図 版 目 次

本文対照頁

図版第1　空中写真　剱崎遺跡と周辺地域（昭和44年10月14日撮影　縮尺10,000分の1）…… 2

図版第2　遺　跡

(1)　調査前の遺跡全景（北から）　(2)　調査風景（北から）…… 7～9

図版第3　遺　構

(1)　墓地跡全景（南から）　(2)　墓地跡全景（北から）…… 10～13

図版第4　遺　構

(1)　墓地跡南溝（東から）　(2)　墓地跡西溝（北から）…… 10～13

図版第5　遺　構

(1)墓地跡北溝（東から）…… 13

(2)墓地跡土坑（東から）…… 10

図版第6　遺　構

(1)　墓地跡西溝の石造遺物出土状況…… 13

(2)　墓地跡南溝の層序（西から）…… 10

図版第7　遺　構

(1)　掘りあがった墓地跡（北から）　(2)　掘りあがった墓地跡（南から）…… 10～13

図版第8　遺　構

(1)　B区～E区遺構検出状況（南から）　(2)　B区～E区遺構検出状況（北から）… 18～22

図版第9　遺　構

(1)　第1号土坑…… 18

(2)　調査終了後の遺跡全景（北から）…… 9

図版第10　遺　物

墓地跡出土土器…… 13・14・16

図版第11　遺　物

墓地跡出土石造遺物…… 13・15～17

図版第12　遺　物

土坑・溝・ピット出土遺物…… 18・19・22・23

図版第13　遺　物

包含層出土土器…… 24・25

挿図目次

頁

第1図　松任市位置図（縮尺300,000分の1）…… 2
第2図　劔崎遺跡と周辺の遺跡分布図（縮尺25,000分の1）…… 4
第3図　劔崎遺跡周辺の地形図（縮尺20,000分の1、明治42年大日本帝国陸地測量部作成）…… 6
第4図　劔崎遺跡の範囲と調査箇所（縮尺5,000分の1）…… 7
第5図　調査区区割図（縮尺1,000分の1）…… 8
第6図　調査区全体図（縮尺200分の1）…… 9
第7図　墓地跡実測図（縮尺80分の1）…… 11・12
第8図　墓地跡出土土器実測図（縮尺3分の1）…… 14
第9図　墓地跡出土五輪塔・寶篋印塔実測図（縮尺6分の1）…… 15
第10図　第1号土坑実測図（縮尺40分の1）…… 18
第11図　第2号溝実測図（縮尺40分の1）…… 19
第12図　C・D・E区遺構実測図（縮尺100分の1）…… 20
第13図　B・C区遺構実測図（縮尺80分の1）…… 21
第14図　土坑・溝状遺構・ピット出土遺物実測図（縮尺3分の1）…… 23
第15図　包含層出土土器実測図（縮尺3分の1）…… 25
第16図　周溝をもつ中世墓の諸例（縮尺160分の1）…… 28
第17図　奈良・鎌倉所在の五輪塔実測図（縮尺8分の1）…… 32
第18図　加賀・能登・越中の五輪塔・寶篋印塔実測図および略図（縮尺20分の1）…… 33・34
第19図　劔崎周辺の小字名（縮尺7,500分の1）…… 38
第20図　手取扇状地における石塔出土遺跡分布図（縮尺75,000分の1）…… 39
第21図　劔崎テラバンバ遺跡出土五輪塔火輪 …… 41

表目次

頁

第1表　周辺遺跡地名表…… 5
第2表　石造遺物番号対照表…… 13
第3表　周溝をもつ中世墓分類表 …… 29
第4表　手取扇状地における石塔出土遺跡一覧表 …… 40

例　　言

1　本書は石川県松任市剱崎町に所在する剱崎遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は石川県農林水産部耕地建設課施行の一般農道整備事業（村井地区）に起因し、同課の依頼をうけた石川県立埋蔵文化財センターが松任土地改良事務所と協議して実施した。調査に係る費用は同課が負担した。

3　現地調査の期間は昭和60年５月１日から同年６月12日までである。

4　調査の実施にあたっては剱崎町を中心とする遺跡周辺地区の有志の参加・協力を得た。

5　挿図中で指示した方位はすべて真北である。また、指示のないものも天地の軸を真北にとっている。断面図の水準線に付した数字はすべて標高で、単位はmである。

6　本書では「あな」を指す用語として土坑および土壙を用いている。各々に付与された意味は次の如くである。

土坑＝地面に穿たれたあな。土壙＝土葬用のはかあなとしてつくられたもの。

したがって蔵骨器を埋置するあなは土坑とした。

7　写真図版の遺物に付した番号は挿図の番号に一致する。

8　発掘調査および本書の作成にあたって次の各位よりご教示・ご協力をいただいた。記して深甚の謝意を表したい。なお、当センター職員各位より種々の教示を得ていることは言うまでもない。

櫻井甚一（石川考古学研究会々長）　東四柳史明・伊林永幸・室山　孝（石川県立図書館加能史料編纂室）　唐川明史（石川考古学研究会幹事）　松任市真宗大谷派本誓寺　（順不同）

9　本書の執筆は石川県立埋蔵文化財センター主事久田正弘、同三浦純夫が担当し、編集は三浦が行った。執筆分担は次のとおりである。

第１章、第２章、第３章第１節、同第２節１の遺構・小結、第４章……三浦　純夫

第３章第２節１の遺物、同節２・３……久田　正弘

10　調査によって得られた資料（遺物・写真・スライド等）は石川県立埋蔵文化財センターが保管している。貸出しを行なっているので学校教育ならびに社会教育資料として利用していただきたい。

第1章　序　　説

金沢市の南部を包括して広がる松任平野は、その規模を誇りながら古くから水害に悩まされてきたが、手取川(てどりがわ)や七ヶ(しちか)用水の整備により、肥沃な水田地帯と化している。

松任平野では昭和50年代に入ってから県営圃場整備事業が実施され、本遺跡をとり囲むように林中(はやしなか)地区劔崎工区の事業が昭和59年度に施行された。この事業にかかる埋蔵文化財の分布調査によって本遺跡の存在が明らかになった。

本遺跡発掘の契機は、県営一般農道（村井地区）の整備事業で、松任土地改良事務所が事業を担当している。本事業は、松任市劔崎町から同村井町にかけての延長1,440mにわたって幅員約10mの農道を建設しようとするもので、昭和56年度から始まり、同63年度に終了の予定である。

昭和59年３月14日耕建発第120号により分布調査の依頼があり、同年５月７日付埋文収第34号により約1,000m²の事前調査が必要である旨回答した。発掘調査の依頼は昭和60年３月22日付耕建発第129号によりなされ、耕地建設課および松任土地改良事務所と協議のうえこれを実施した。

現地調査は昭和60年５月１日より開始した。表土の除去を行なったあと、仮設事務所を建設し基本杭の設定を行なう。５月中旬は降雨が続き、やや調査が停滞する。５月13日には五輪塔の一部が見つかり墓地跡ではないかとの可能性を抱かせる。その後、空・風輪や水輪も検出され、骨片も見つかったことにより、中世墓地跡と判明する。５月24日には墓地跡において慰霊の式をおこなう。この日には橋本澄夫所長をはじめセンターの職員が数名来訪する。５月28日より墓地跡を掘り始め、同月31日に掘り終える。同日、松任市文化財保護審議会委員が２名見学に訪れる。併行して掘っていた調査区南側の平安時代の遺構も６月１日に掘り終える。６月３日より市堀元一・横山貴広両調査員の応援を得て実測作業に着手する。後半は晴天にめぐまれ、実測や写真撮影も順調にすすみ、６月12日には器材をセンターへ運び込み、現地調査を終了する。

現地調査では地元劔崎町の有志を中心とした方々にご協力をいただいた。とくに工区長の下村正一氏にはいろいろとご高配いただき心より謝意を表したい。７月25日には劔崎町を中心とする地元の住民を対象にスライドを使って成果の報告会を開催し、約30名の方々の参集を得た。

遺物整理は、土器の洗浄・記名・接合・復元・実測・浄書および石造遺物の実測・浄書を社団法人石川県埋蔵文化財整理協会に委託し、遺構図の浄書は久田正弘が担当した。調査関係者は次の通りである。

調査担当者　石川県立埋蔵文化財センター主事三浦　純夫、同久田　正弘

調　査　員　市堀　元一　横山　貴広

調査協力者　下村　正一　中崎喜巳雄　中田　正幸　西村　正治　橋本　正夫　藪下　友之
石場三智江　北崎喜美子　北野スミ子　下村二三子　竹内　貞子　土田　洋子
中崎　スギ　西村よし江　橋本　文子　藪下外喜子　吉崎　ゆき　吉森寿美栄
（以上劔崎町）端　美砂子（石同新町）

第2章　劔崎遺跡の環境

第1節　位置と地理的環境（第1・2・3図、図版第1）

劔崎遺跡は石川県松任市劔崎町に所在する。小字名はロンデンである。松任市は、南北に細長い石川県の中央部よりやや南側、手取川の北に広がる平野部に位置し、劔崎町はその南部にあり世帯数は約70、人口は約340人を数える。耕地に恵まれた兼業農家が多いが、町の北側では新興住宅の増加も見られる。また、近代に入ってみごとに整備された七ケ用水のひとつ山島用水は、本町内で南川と中川に分流し、さらに南川が細口川と北川に分かれて北流している。

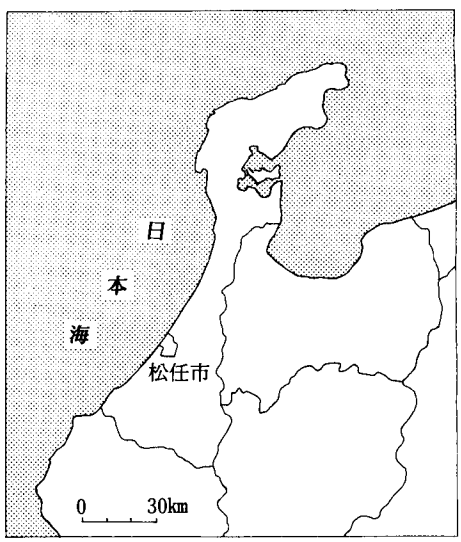
明治初年に編纂された『皇国地誌』は当時の劔崎村について次のように記している。

地勢　概ネ平坦　山島渠東南菅波村ヨリ数派ニ分レ　村地内ヲ縈回ス　人家中間ニアルヲ本村トシ　其東ニアルヲ枝村東垣内トス

地味　全土灰色　其質美　稲粱ニ宜ク　水利ニ便ナリ

さて、本遺跡周辺の地形であるが、県営圃場整備事業が終了した現在ではほぼ平坦地化している。しかしながら、明治42年作成の2万分の1地図を観察すると、先述の山島用水の流れが、30〜40mの幅をもって等高線の乱れを招いており、ある時期に手取の本流があったことを十分に窺わせる。本遺跡はこの河道の背後(北側)に形成された微高地に位置しており、相当な地形の凹凸があったことを看取しうる。

本遺跡の形成と不可分の関係にあった手取川は、流程約70kmを測る県下最長の河川である。その源は、「白き神々の座」といわれる霊峰白山に発し、大日、尾添、直海谷の各水系を集めて北に流下し、石川郡鶴来町で流れを大きく西にとり、日本海に注いでいる。この川によって形成されたのが扇状地として典型的な手取扇状地である。本遺跡はこの扇央部に位置を占める。扇状地は半径約13km、扇開角約110度を測り、扇端は海岸砂丘に続いている。南は能美山地、東は富樫山地に接し、北東部扇端は犀川扇状地と複合している。古来「手取川はその水路を七度変えた」と言われ、この流れの跡が今に残る七ケ用水であると伝えられている。七ケ用水とは、北から富樫、郷、中村、山島、大慶寺、中島、新砂川の各用水を指す。このうち富樫、郷、中村の各用水と山島用水の北川、中川は北方に流れをとり、山島用水の南川と大慶寺、中島、



第1図　松任市位置図　1/300,000

新砂川の各用水は西に流れをとっている。両用水群の中心を扇央稜線といい、扇状地の開発にとって重要な役割を担った部分である。本遺跡はほぼこの稜線上に位置している。

手取扇状地は扇状地礫層を主とする洪積世末期層よりなり、土壌は、扇端部の南側にグライ土壌が広がるほかは、扇央稜線を中心にして北側に黒色―黄褐色土壌あるいは、灰色―灰褐色土壌の分布が多く、南側は礫質土壌が広く分布している。

第2節　歴史的環境（第2図）

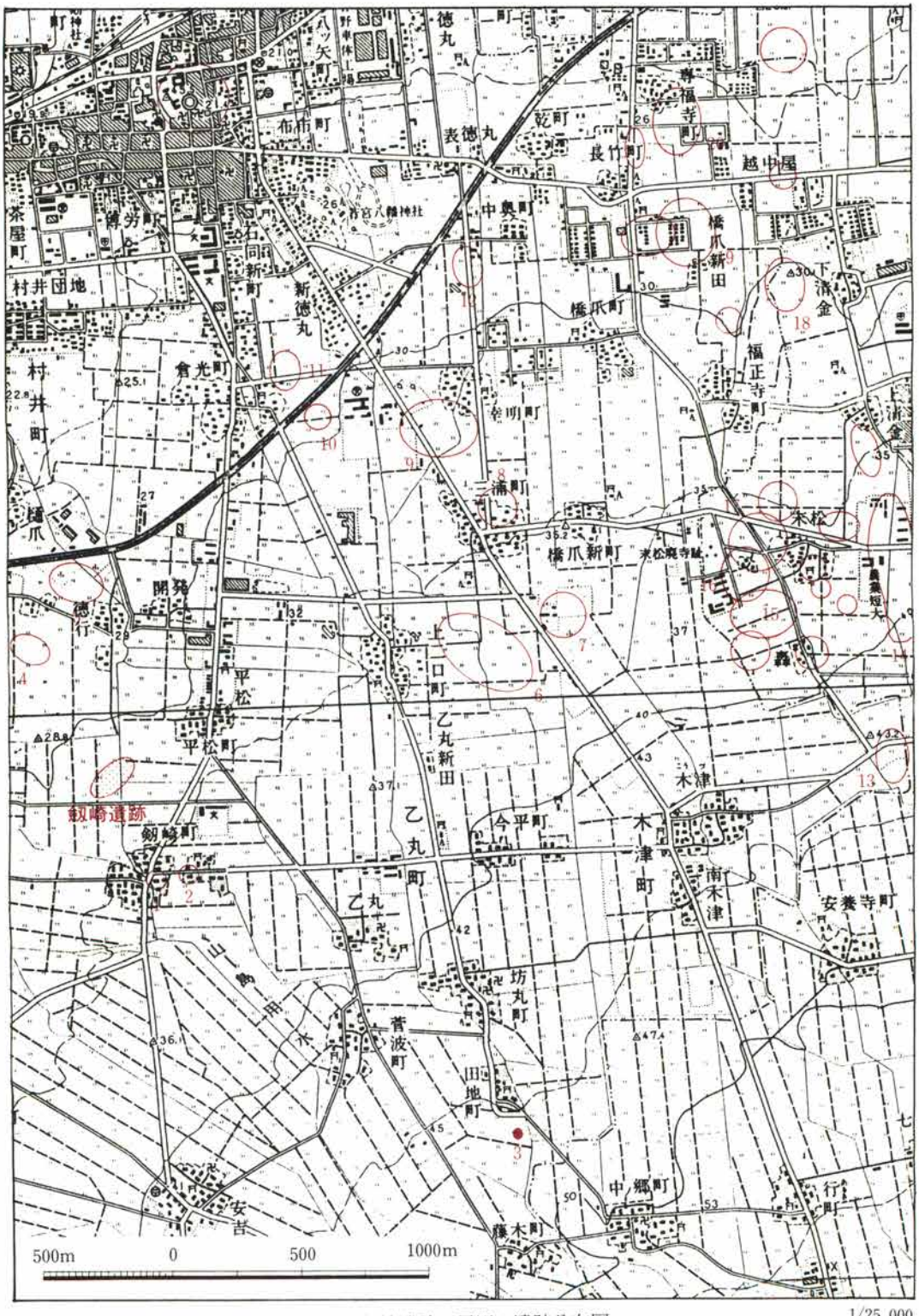
手取扇状地の開発の歴史は、「暴れ川」手取との苦闘そのものである。浅香年木氏が、手取扇状地における在地諸階層の課題は、いわゆる「中間地帯」であり、積雪寒冷地帯で、さらには開発の極めて困難な扇状地という三重の不利な条件のもとで、いかに開発の拡大、維持をはかるかにあったと指摘される[1]ように、本遺跡を含む扇央部の遺跡の立地および展開もまさにこの課題ぬきには成立しえないのである。

手取扇状地における遺跡の分布は、扇央稜線の北側にほぼ限定される。本遺跡周辺は、微視的に見た場合、稀薄な分布しか示さないが、北東約3kmの野々市町(ののいち)末松(すえまつ)を中心とした地域に稠密な分布を見ることができる。

縄文時代晩期後葉には末松遺跡[2]が立地している。ついで、弥生時代の中期前葉には、上林[3]、末松で、後期には三浦[4]、上二口(かみふたくち)[5]、末松の各遺跡で、いずれも遺構に伴なわない土器の出土を見る。小規模で点在的な、しかも継起性をもたない遺跡である。自然かんがいに依存した、生産性の低い「開発」段階である。

古墳時代前期には上二口遺跡が再び占地される。同中期には末松遺跡で9基の竪穴住居跡が検出されており、初めて積極的な定住化傾向がうかがえる。後期になると田地(たち)古墳[6]と「末松古墳」が築造される。田地古墳は扇央稜線上に営まれた、7世紀初頭の所産と考えられる古墳である。墳丘は既に失なわれていたが、狭長な横穴式石室より、須恵器、刀子、銀環、鉄鏃が検出された。田島明人氏が「古墳期にすでに、扇央部の開発に着手し、広域を統治した政治勢力が存在していたとは考えられない。」と指摘されるように、本墳の築造に窺える扇央部の氾濫原への積極的進出は、次代にその存在を生かすことなく、厳しい地理的条件の前に姿を消している。

奈良時代の開始前夜より末松地区に、末松ダイカン遺跡[7]と末松遺跡の形成を見る。先述のごとく末松地区は継起的な遺跡形成の見られる地区で、1km四方に13ケ所の遺跡が密集している。前者は7世紀後半、後者は7世紀末から8世紀初頭にかけての集落で、末松廃寺の成立に大きく関与しているとみられる。末松廃寺[8]は奈良時代前期の建立と見られる法起寺式の伽藍配置をもつ寺院跡で、金堂や塔の跡が検出された。寺院創建以前の遺構としては7世紀後半の竪穴住居跡、廃絶後の遺構には平安時代後期の掘立柱建物跡群が検出されており、扇央部開発の拠点として連綿として枢要の地であったことを示している。また、本地区の西方約1kmにある上二口遺跡では、奈良時代から平安時代初期にかかる集落の形成を見ることができ、竪穴住居から掘立柱建物への



第2図　剱崎遺跡と周辺の遺跡分布図

1/25,000

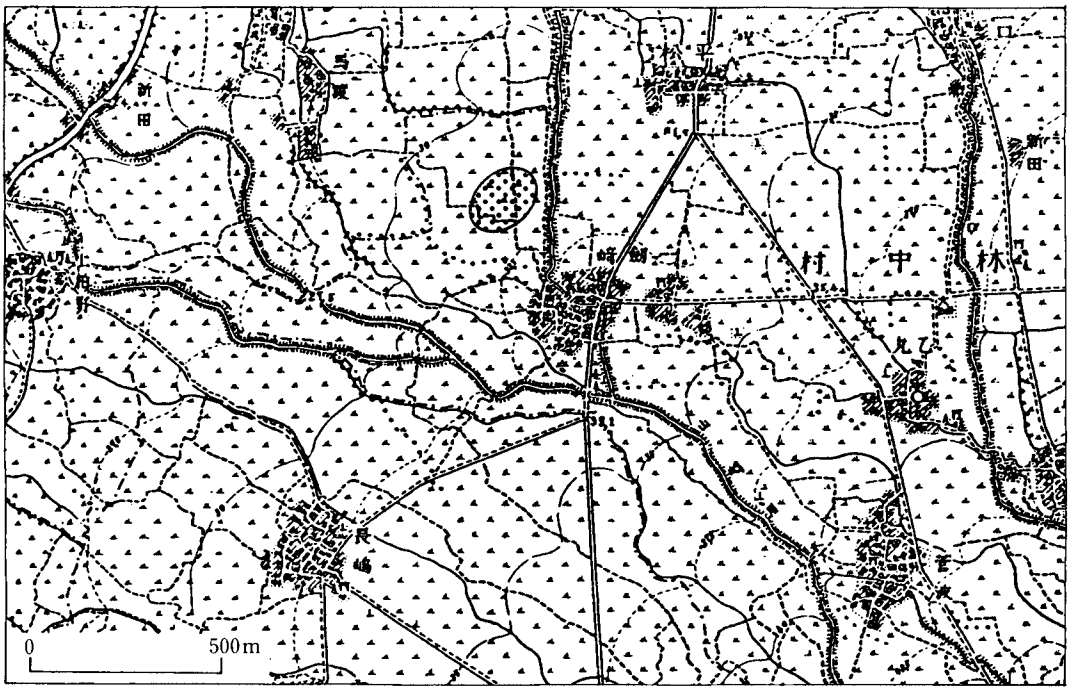
第１表　周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	現況	種別	時代	備考
1	劔崎館跡	松任市劔崎町	宅地	館跡	室町	本書
2	劔崎テラバンバ遺跡	〃　〃	〃	墓地跡	中・近世	五輪塔、寶篋印塔出土
3	田地古墳	〃　田地町	道路	古墳	古墳	横穴式石室 須恵器、銀環、鉄製品出土
4	延寿寺遺跡	〃　村井町	水田	包含地	平安・中世	須恵器、土師器、五輪塔出土
5	村井遺跡	〃　〃　他	〃	〃	中世	陶器出土
6	上二口遺跡	〃　上二口町	〃	集落跡	弥生～平安	竪穴住居跡、掘立柱建物跡検出
7	三浦高麗野遺跡	〃　三浦町	宅地	墓地跡	中世	五輪塔、寶篋印塔出土
8	三浦常在光寺跡	〃　〃	水田	寺院跡	〃	耕地整理で土器が出土したとの伝えあり
9	三浦遺跡	〃　〃	〃	集落跡	弥生～中世	掘立柱建物跡検出
10	若林長門館跡	〃　倉光町	宅地	館跡	不詳	『寶永誌』に記載あるも決め手なし
11	倉光ゴキヤマ遺跡	〃　〃	水田	〃	中世	五輪塔、寶篋印塔、陶器出土
12	西方寺跡	〃　幸明町	〃	寺院跡	中・近世	五輪塔、経石（一字一石経）出土
13	末松遺跡	〃　木津町	〃	集落跡	弥生～中世	竪穴住居跡、掘立柱建物跡検出
14	末松Ｃ遺跡	野々市町末松	〃	〃	奈良・平安	竪穴住居跡、掘立柱建物跡検出
15	オオダチ館跡	〃　〃	工場	館跡	平安・室町	土器出土
16	末松廃寺跡	〃　〃	公園	寺院跡	奈良	金堂、講堂跡検出
17	ダイカン遺跡	〃　〃	果樹園	集落跡	古墳～中世	竪穴住居跡検出
18	橋爪遺跡	松任市橋爪町	水田	包含地	縄文	打製石斧出土
19	長竹遺跡	〃　長竹町	〃	〃	縄文～中世	縄文土器、弥生土器、土師器、 五輪塔、寶篋印塔出土
20	専福寺跡	〃　専福寺町	社地	寺院跡	中世	五輪塔、仏具、花器出土

移行を知ることができる。ともかく７世紀後半より扇状地における新しい開発段階が開始されたことは否めず、それが、国家的勧農政策に裏づけられたものか否かは、末松廃寺に対する評価に大きく関わるものと思われる。

安養寺遺跡[9]は末松廃寺跡の南約1.5kmに立地する奈良時代後期から平安時代中期にかかる遺跡である。三浦遺跡は末松廃寺の西約１kmにあり、平安時代前期～中期を主体とする。ともに末松ブロックより南下、西進し、開発の進展を窺わせる遺跡として注目される。後者では堀立柱建物に平行して、溝の開削がなされており、遺構としてははじめて人工的なかんがい施設を見ることができる。

平安時代後期は扇状地開発における第三の画期と見られている。本遺跡の一部もここに含まれるが、飛躍的な遺跡分布の拡大をみていないのはすでに指摘されている通りである。



第3図　劔崎遺跡周辺の地形　1/20,000

中世に入ると倉光(くらみつ)ゴキヤマ遺跡[10]、三浦常在光寺遺跡、西方寺遺跡などが知られる。また文献によって周囲の村落の成立状況を見ると、『平家物語』にその名を見る倉光と、永仁4年に見える中興保のほかは、室町時代までまたねばならない。島田保、徳丸保、安吉保、村井、長島、安田保などの名が室町時代前期から後期にわたって見える。

本遺跡の墓地は室町時代に造営されたと見られるが、周辺には、延寿寺遺跡、三浦高麗野遺跡倉光ゴキヤマ遺跡などの石塔墓を出土した遺跡があり、集落形成の歴史とあわせて考究すべき課題である。

註

(1) 浅香年木『古代地域史の研究』　法政大学出版局　1978　東京。
(2) 1984年と1985年に石川県立埋蔵文化財センターが発掘調査を実施。
(3) 湯尻修平『安養寺遺跡群（上林地区）調査報告』　石川県教育委員会　1975　金沢。
(4) 石川考古学研究会編『加賀三浦遺跡の研究』　石川県教育委員会・松任町教育委員会　1967　金沢。
(5) 中島俊一『松任市上二口遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1982　金沢。
(6) 金山顕光・田嶋明人・高瀬　澄・小嶋芳孝「松任市田地古墳緊急調査報告」『石川考古学研究会々誌』　第14号　石川考古学研究会　1971　金沢。
(7) 湯尻修平「末松ダイカン遺跡」『日本考古学年報』　第30号　日本考古学協会　1979　東京。
(8) 河原純之・吉岡康暢『史跡末松廃寺』　野々市町教育委員会　1967　石川県野々市町。
(9) 中島俊一・梶　幸夫『安養寺遺跡群発掘調査概報』　石川県教育委員会　1975　金沢。
(10) 注(4)文献に同じ。12～13頁。

参考文献（五十音順）

手取川七ケ用水史編纂委員会『手取川七ケ用水史』上巻　手取川七ケ用水土地改良区　1982　松任。
吉岡康暢編『東大寺領横江庄遺跡』　松任市教育委員会　1981　松任。

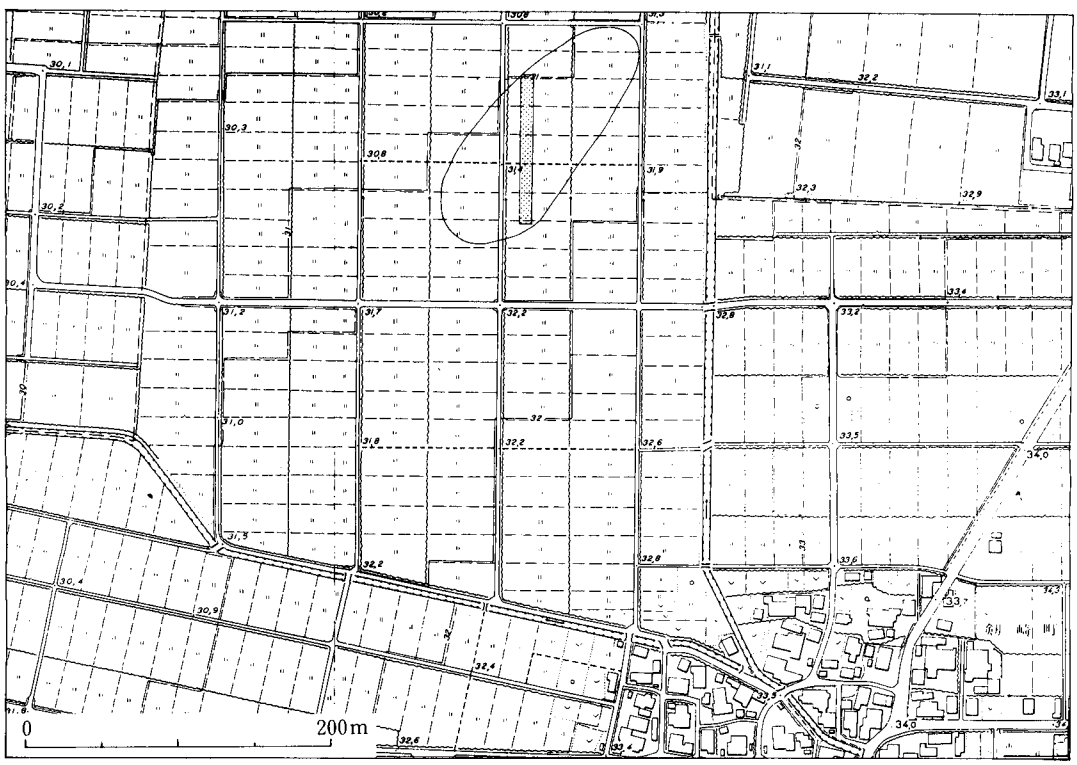
第3章　遺構と遺物

第1節　概　　要

剱崎遺跡は剱崎集落の中心部より北西約400mに位置している。一帯は昭和59年度に県営圃場整備事業が終了し、一筆2,000m²に及ぶ大型水田地区と化している。かつて凹凸の著しかった地形も次第に平坦化されたが、東に高く西に低い基本的な等高線の流れに変わりはない。標高は地表面で31mを前後する。

遺跡の範囲は分布調査によって確認され、北東―南西に主軸をとる、長さ約180m、幅約70mの長楕円形を呈して広がる。今回の発掘調査はその中央部を対象とし、対象面積は約1,000m²、調査面積は720m²である。面積が減じたのは、農道の両脇に建設されていた水路（U字溝）の崩壊を防ぐため1mずつ掘り残したためと、A区内に水路ボックスが完成していたため対象とできなかったことによる。

調査区の割付は、第5図に示したように10m×10mのグリッドとし、東西方向にアラビア数字南北方向にアルファベットを付し、その交点の北西を2B、2C区などと呼称した。南北軸は農道の



第4図　剱崎遺跡の範囲と調査箇所　　1/5,000

センターラインに平行し、真北に対しては2度30分東にふれている。

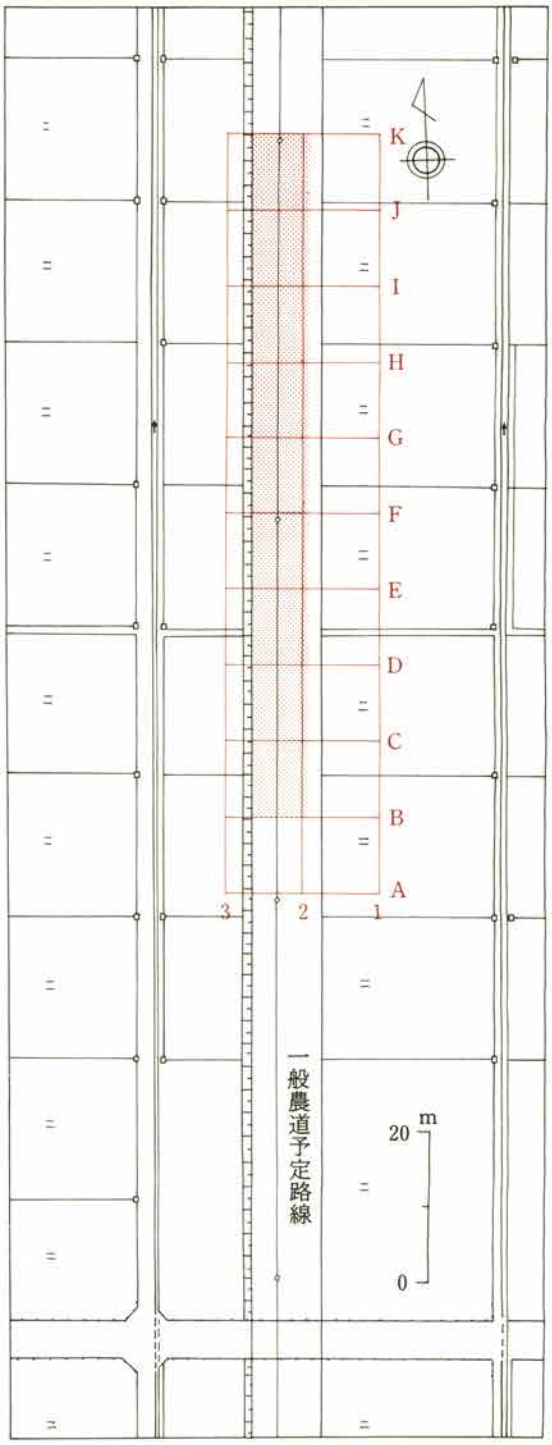
つぎに遺構の分布および土層の概要について述べる。（第6・7・12・13図参照）これは南側と北側では様相を異にする。田面より遺構面までの深さは30cm～70cmを測り、遺構面の標高はBラインで30.70m、Cラインでは30.60m、I～Kラインでは30.40mを測り、北に向かってわずかに低くなる傾向を見せる。

土層は大きく5層に分けられる。第1層は耕土層、第2層は黄色土層（弱粘性）、第3層は灰色土層（粘性あり。a、b 2層に分かれ、3b層は黄色強い）。第4層は黄色土層（粘性あり）、第5層は黄褐色土（粘性あり）で包含層である。地山は明黄褐色土層で粘性がある。礫は地山層に部分的に含まれる。包含層の存在はB区～E区とI区に限られる。

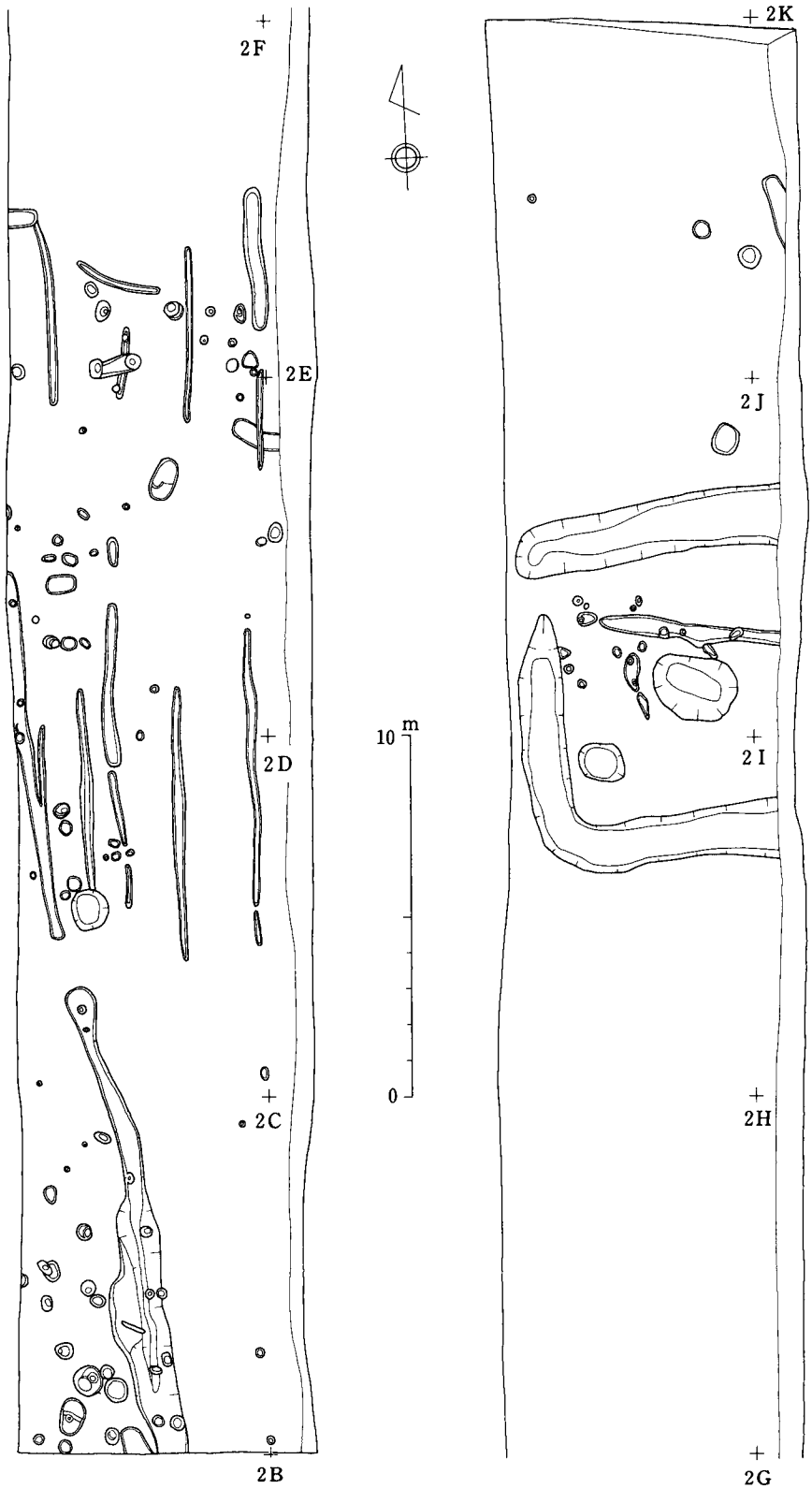
遺構は、包含層の存在するB区～E区で、平安時代の溝状遺構、ピット群を検出した。E区からH区にかけての約30mは遺構が存在しない。H・I区で周溝をもつ方形の中世墓地跡を検出した。墓地は平安時代の包含層を切って造営されており、溝の内側で土壙、溝状遺構、ピットを検出した。なお、中世墓地跡と同時期の遺構は検出されていない。

平安時代の遺構では建物跡が検出されていない。今回の調査により該期の遺構分布は南側に密であることが判明したので、近接する場所にその存在を予測できる。ただ、その存在が継起性を有するものでなかったことは推測しうる。また、手取扇状地における中世墓地の発掘は初めてである。このことは、扇状地開発の問題とあわせて当時の埋葬方法や信仰形態の実体を探るうえで重要な意義をもつといえよう。

遺物は平安時代のものとしては、須恵器、土師器のほかに緑釉・灰釉陶器などを検出している。また中世墓地跡からは五輪塔・寶篋印塔や



第5図　調査区区割図　1/500



第6図　調査区全体図　1/200

蔵骨器の可能性のある珠洲(すず)、加賀、越前などの陶器や土師質土器が検出されている。

第2節　各　　説

1　墓地跡

遺構（第7図、図版第3～第7）

調査区北側に位置し、他に同時期の遺構の存在を見ない。平安時代の土坑、溝状遺構、ピットが、周溝内側に存在する。本遺構の検出面での標高は約30.5mを測る。

本遺構は、三方に溝を配し、溝の内側に土坑を備えており、東側は未調査であるが、方形ないしは長方形のプランを想定することができる。南北の主軸を3度30分西にとり、周溝隅はほぼ直角をなす。また、西辺の溝は北辺と連結していない。部分的な名称については、説明のために、周溝の内側を方形部、三辺の溝をそれぞれ南溝、西溝、北溝と便宜的に呼称したい。

方形部の長さは、南北7.1m、東西は、調査区の東端まで5.9mを測る。また、周溝幅も含めた南北の長さは10m、東西は現状で7.1mを測る。

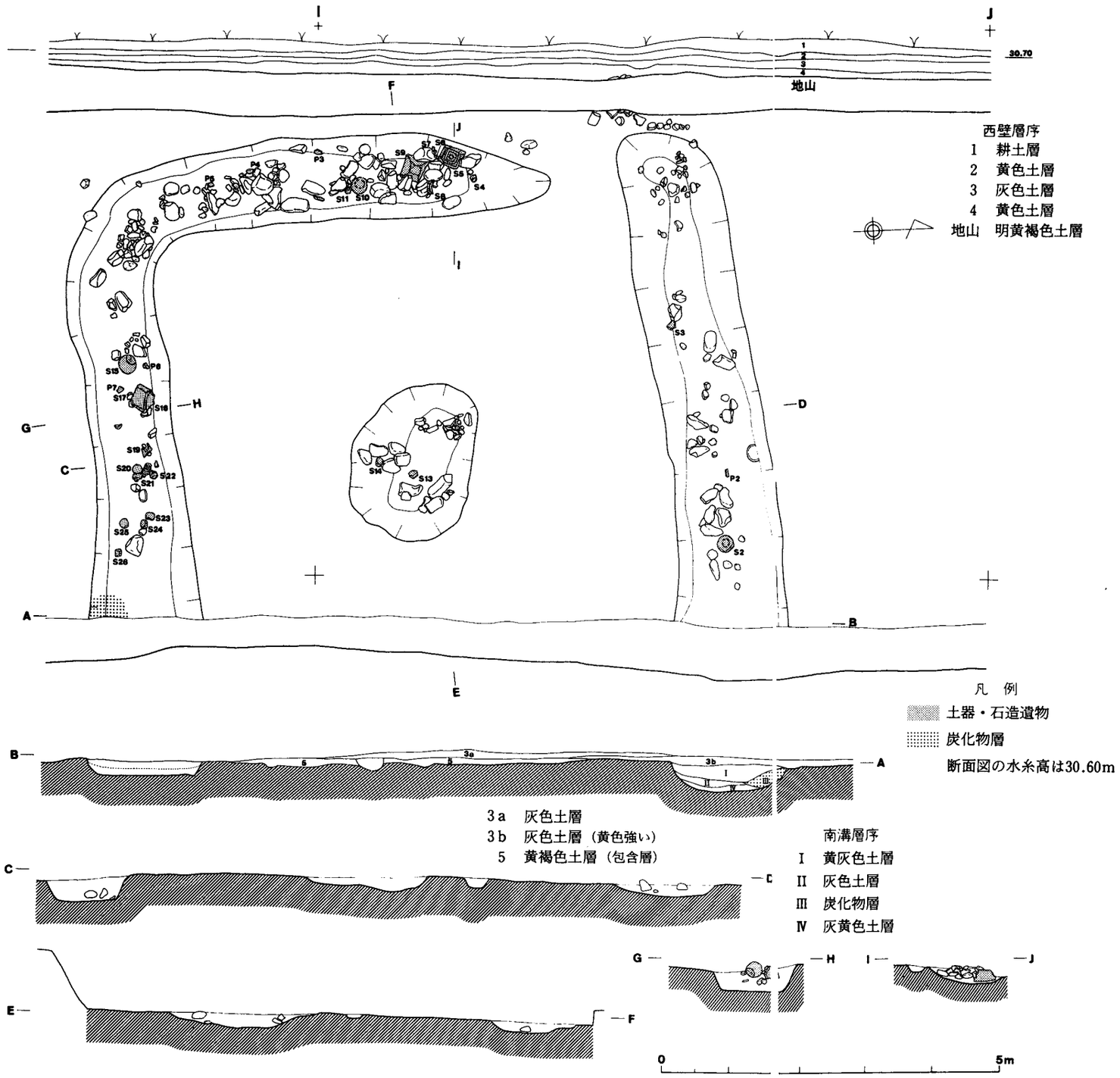
土坑　方形部内の土坑は、主軸を北西―南東にとり、方形部の主軸に対してずれた位置にある。平安時代の包含層を切っており平面形は不整な楕円形を呈し、長軸240cm、短軸180cmを測る。法面はゆるやかな傾斜を示し、底面は長方形を呈する。長辺160cm、短辺70cmを測る。深さは、最も深いところで20cmである。覆土は、黄灰色土層で、骨片が全体にみられたが、とくに西側に集中していた。また、拳大から長径30cmに及ぶ礫（河原石）もみられた。出土遺物には、石製の組合わせ式五輪塔（以下五輪塔と称する）の空輪1点と不明品1点がある。

本土坑は方形部内にあって、しかもその中心は各辺の溝よりほぼ等しい距離にある。したがって、本土坑は墓地跡の中心的な位置に存在すると考えられ、墓地跡の形状も東西、南北相等しい方形と推定できる。以下この形状を前提として記述をすすめたい。

南溝　幅は東端で170cm、平均的には120cm前後を測る。断面は東端（A－B断面）で弧状、中央部（G－H断面）で逆台形を呈する。深さは東端で約40cm、中央部と西南隅で約30cmを測り、溝底は東に向かって下がっている。東側の断面で観察する覆土は、第1層が黄灰色土層（骨片含む）、第2層が灰色土層（粘性強い）、第3層が骨片を多量に含む炭化物層、第4層が灰黄色土層（粘性あり）である。炭化物層は東端部にのみ観察されたもので、骨片のあり方とともに注目すべきである。

出土遺物には、土師器の坏3点、土師質土器の小皿2点、陶器では珠洲の片口鉢1点、越前の甕1点、五輪塔の空風輪2点、空輪1点、風輪3点、火輪3点、水輪1点、寶篋印塔の相輪1点がある。土器も石塔も小片となっているものが多い。空輪、風輪はもとは一石であったものが分離したものである。

遺物はいずれも溝底より遊離した状態で出土し（G－H断面）、原位置を保っているものはないと



第７図　墓地跡実測図

1/80

考えられる。ただ、五輪塔は散乱しながらも同一個体が近接する位置で出土しており、また、土器を含めた遺物の出土範囲が、溝中央部よりやや西寄りの約3m幅の中に限定されるのも原位置を知るうえで示唆的ではある。五輪塔は、火輪のS16と19・22が接合でき、空風輪のS23・24・25・26が同一個体である。

同時に出土した礫は長径10～30cm大の河原石で、量は少ない。

西溝　南溝とほぼ直角の位置にあり、南西隅は丸い。北端は細くなり、北溝との間に1mの空間をつくっている。幅は中央部で120cm、その溝底で80cmを測る。深さは中央部で約20cm、北側の先端部で約10cmと、北へ向って浅くなっている。断面形はゆるやかな弧状を呈する。覆土中には骨片の包含が全体にわたって見られた。

出土遺物には、土師器の坏1点、土師質土器の小皿2点、珠洲陶器の壺1点、片口鉢1点、瀬戸陶器の壺1点、産地不明の甕1点のほか石塔類では五輪塔の火輪3点、水輪1点、寶篋印塔の相輪1点、笠1点、そして不明品（空風輪か相輪の軸）1点がある。いずれも小片が多い。石塔は溝底についたものが多い。（I－J断面）

遺物の出土状態であるが、西溝と同様、現位置にあるものはないと考えられる。礫は南溝に比べて多量で、しかも長径30cm大のものが多い。北側においては、これらが石塔と折り重なるようにして存在し、とりわけ高い密度を示す。

北溝　丸くおさめた西端を、ほぼ西溝外側の延長線上におき、東端は未調査となっている。西端部で幅140cm、溝底幅40cm、深さ20cmを測る。中央部で幅150cm、溝底幅90cm、深さ約20cmを測る。溝底レベルは西端のみ低く、あとは平坦である。覆土は暗灰色土層で、上部は黄色、下部は灰色が強く、いくぶんの違いをみせる。断面形は弧状を呈し、南側法面は傾斜がゆるく、北側はやや急に立ち上る。

出土遺物には、土師器1点、珠洲陶器1点（器種不明）、加賀陶器甕1点、瀬戸陶器瓶子2点、五輪塔では、空輪1点、水輪1点、不明品1点がある。

この溝では他に比べて土器、石塔とも量が少なく、礫の量は南溝に似て少ない。遺物、礫ともに集中した箇所は見られない。

遺物（第8・9図、図版第10・11）

遺物の出土位置は、土器の1・2・4・5・7・8が南溝、3・6・9・10が西溝、11・12が北溝である。このうち8が遺構実測図（第7図）のP6、9がP4、10がP5である。石造遺物の対照については第2表に掲げた通りである。

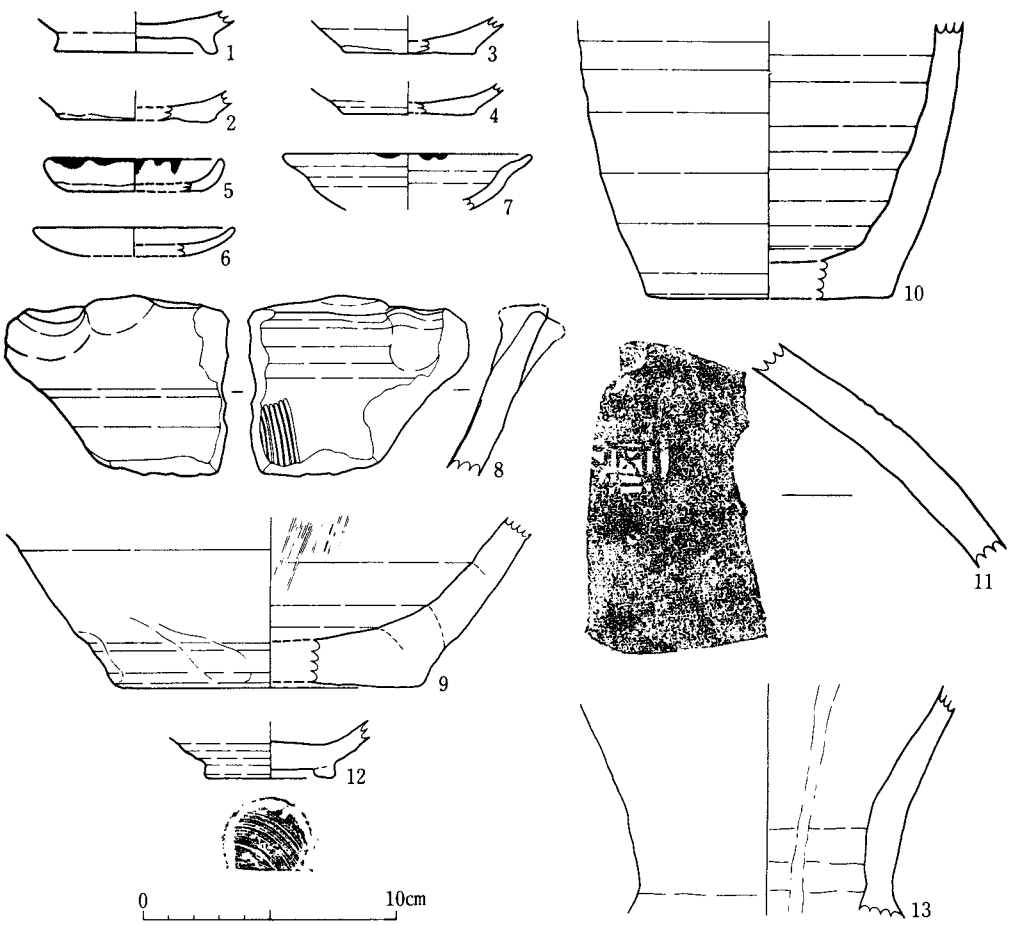
土師器　1は内面黒色の有台坏であり、高台径6.4cmを測る。外面と高台はヨコナデ、内面はミガキ調整がなされている。2～4は無台坏の底部であり、全てヨコナデ調整がなされ、底部は回転糸切りである。

第2表　石造遺物番号対照表

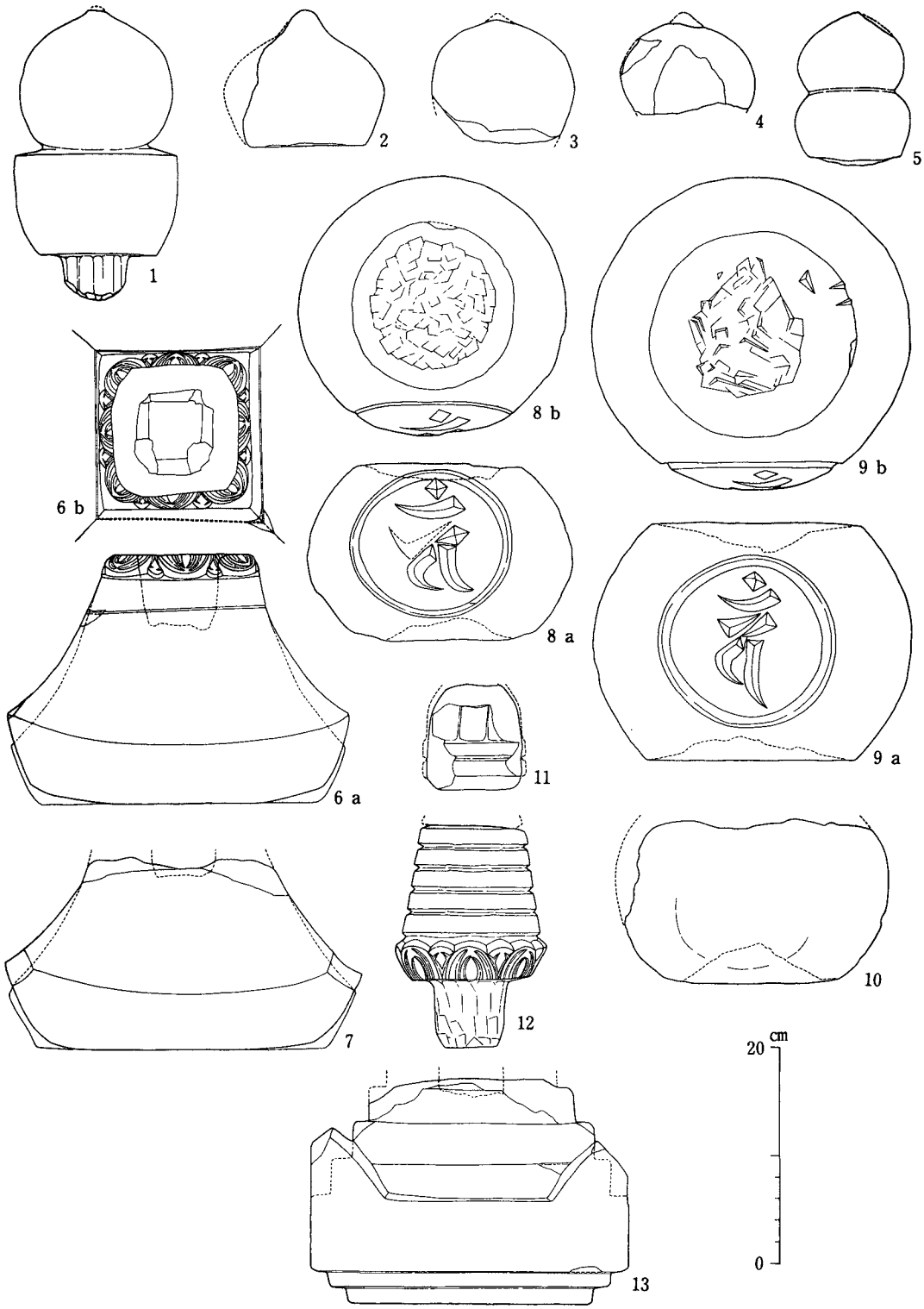
実測図番号	遺構図番号	出土位置
1	S20	南　溝
2	S3	北　溝
3	S14	土　坑
4	S13	土　坑
5	S17	南　溝
6	S16・19・22	南　溝
7	S9	西　溝
8	S2	北　溝
9	S15	南　溝
10	S10	西　溝
11	S11	西　溝
12	S21	南　溝
13	S5・6	西　溝

土師質土器　5は口径8.4cm、器高1.3cmを測る。底部外面には指によるオサエがみられ、口縁部には軽いヨコナデが施されており、内外に灯芯油痕がみられる。6は口径8cm、器高1.2cmを測り、比較的浅い器形である。7は胴部をヨコナデで強く押えて口縁を外反させ、口唇部を外側に少しつまみ上げている。口縁内外面の一部に灯芯油痕がみられる。5は13世紀後半～14世紀前半、6・7は14世紀後半～15世紀中頃に位置づけられる(1)が、そのなかでも14世紀末～15世紀前半に限定されよう(2)。

陶器　8・9は珠洲の擂鉢である。8は口唇部に面取りを行ない、指によるオサエで片口を作り出している。胎土は2～3㎜大の砂粒や白色粒子を多く含み、色調は灰色を呈す。9は色調が灰白色であるが、胎土は8と同じであるので同一個体の可能性もある。内面は磨滅しているためにおろし目の数は不明である。8は吉岡康暢氏の編年(3)のIV期にあたり、そのなかでも新しい頃に比定され、14世紀後半の時期を与えることができる。10は珠洲の壺の底部である。底径9.4cmを測り、ヨコナデ調整後体部下半にケズリ調整がなされている。11は加賀の甕である。胎土は灰白



第8図　墓地跡出土土器実測図　1/3



第9図　墓地跡出土五輪塔・寶篋印塔実測図　1/6

色を呈し黒色粒子が非常に多く含まれている。肩部にはスタンプ文（菊花文＋格子文）が施されている。外面にはオリーブ灰色の自然釉が全面に付着している。内面はオサエのあとにヨコナデ調整がなされている。12は瀬戸の平埦である。底部は回転糸切り後に低い高台を貼り付けており、体部下半はケズリ調整がなされている。内側の底面近くには目跡がみられる。素地は白っぽい灰白色で、釉はオリーブ灰色を呈す。14世紀末～15世紀前半に位置づけられよう。13は瀬戸焼の締腰形態の瓶子の体部下半である。素地は灰白色を呈し、オリーブ灰色の釉が施されている。内面には釉だれがみられる。藤澤良祐氏の編年[4]によると13世紀後半～14世紀前半に位置づけられる。

墓地跡からは他に越前の甕、越前ないし加賀の甕、瀬戸の締腰形態の瓶子の小片が出土しているが図化し得なかった。

五輪塔　周溝および土坑から出土した。ほとんどのものが欠損して出土しているために個別の部位でも全形を知り得るものは少ない。破片で数えると空風輪２点、空輪３点、風輪２点、火輪６点、水輪３点が出土している。

１は現存高26.5cm、空輪高13cm、風輪高9.5cm、空輪径14cm、風輪径15cm、ほぞ（挿入部）径６cmを測る。２～４は空輪の破片である。５は現存高14cmでほぞを欠いている。空輪高７cm、風輪高７cm、空輪径9.7cm、風輪径10.5cmを測る。６はほぼ完形の火輪である。高さ23cm、軒上端幅32cm、軒下端幅22.5cm、軒の厚さは5.5cmを測る。ほぞ穴（空風輪納入穴）は上幅7.5cm、下幅5.5cm、深さ７cmを測り、幅約3.5cmの工具で四辺から彫り込んである。頂上に高さ2.4cmの複弁反花の露盤を刻み出しており、露盤下端から2.5～３cm下った所に一条の横線が四方に巡らされている。軒の反りはやや強い。７は上端と軒先を欠くが、現存高20cm、軒下端幅27cm、軒の厚さ5.5cmを測る。８～10は球形の上下を大きく切った様式のもので最大径を中位におく水輪である。８は最大径24.7cm、高さ16cm、切り口上幅15.3cm、下幅15cmを測る。切り口面には幅約1.4cmの工具痕がみられる。高さ13.5cm、幅15cmの円相の中には金剛界大日如来の種子「vaṃ」が薬研彫りされているが筆勢は弱い。９は最大径29cm、高さ15cm、切り口幅は上下とも19cmを測る。円相は直径16cmの正円に近く、「vaṃ」が薬研彫りされているが筆勢は弱い。10は現存高15cm、復元径25cm、切り口上幅は16cmを測る。もろい砂岩で作られており、しかも風化が著しいために円相及び種子は不明瞭であるが、「vaṃ」があると推定される。

出土状態や石質から判断すると６・９が同一の五輪塔であると思われる。

寶篋印塔　周溝内より破片で相輪２点、笠２点が出土しており、接合の結果、相輪２点、笠１点となった。

11・12は相輪の破片である。11は寶珠を受ける請花と九輪の一部であり、現存高9.5cmを測る。12は現存高20.5cm、請花径14cm、請花の下端径11cm、請花の高さ３cm、ほぞの長さ6.2cm、径6.5cmを測る。請花は蓮弁と間弁を７葉ずつ配している。各輪の高さは1.5cmであり、その間に幅約５mmの溝が造り出されている。ほぞには調整痕が明瞭に認められる。13は笠であり、上端と隅飾突起の先端を欠いている。軒部より下へ二段、上へ三段以上とし隅飾突起はほぼ垂直に立ち上がる。

下一段目は高さ1.4cm、幅26.3cm、下二段目は高さ1.5cm、幅23cmを測る。上一段目は高さ3.1cm 、幅26cm、上二段目は高さ3.9cm、幅22.5cm、上三段目は高さ3.2cm、幅19cmを測る。上四段目以上は欠損しているがほぞ穴底部の位置より上部は五段と推定される。

石塔の材質は2・10が軽石凝灰岩であり、他は火山礫凝灰岩である。

最後に石塔の数について整理しておきたい。五輪塔は空風輪の個体数や石材の観察をもとにすると7基、寶篋印塔は2基確認することができる。また五輪塔の地輪は出土しておらず、寶篋印塔は笠と相輪の一部が出土したのみである。

小　結

墓地跡の形状については方形と推定できることは既に述べた。再びその法量について記すと溝を含めた南北長は10m、方形部の南北長は7.1mである。また、東西長は土坑を中心として復元すると、土坑中心より西溝の外端で4.9mを測るから、復元値は9.8m、また、西溝の内側までは3.6mを測るから、方形部の復元値は7.2mである。東西、南北ほとんど差のない法量で、築造時における規格性の高さを想定することができる。

墓域は前述の10×9.8mの範囲であるが、溝によって四周を囲まれた方形部は、埋葬および造塔行為がなされた場所と推定できる。ただ南溝内において検出された骨片を多量に含む炭化物層の存在は、この位置で火葬がなされた可能性を推測せしめる。方形部における石塔の造立状況は、溝内の石塔の検出状況により本来の位置を想定できる。点数は西溝→南溝→北溝の順に少なくなっており、西側から南側にかけて造塔が中心的になされたことを示唆している。

次に蔵骨器の問題であるが、この用途に供しうるものとして、珠洲、加賀、瀬戸の各中世陶器があげられる。ただ、いずれも小片にすぎるので、ここでは形態より考えられる機能を指摘するに留めたい。珠洲の壺（第8図10）、瀬戸の瓶子（13）、加賀の甕（11）は蔵骨器として機能しうる。容量的な観点に立てば、珠洲・瀬戸は単数用、加賀は複数用と見ることが可能である。

墓地の造営時期については、土器、石塔の二者を考え合わせる必要がある。土器の年代については既に述べている。石塔は、完形塔もしくはそれに近い資料と比較すると、金沢市普正寺遺跡[5]の一群に近い様相が認められる。ただ、火輪の複弁反花の彫りが浅いこと、水輪の円相が不整なこと、梵字の筆勢が弱いことなどから、後出性が窺える。羽咋郡富来町の地頭墳墓窟（やぐら）出土の五輪塔群[6]は形状、法量の点でほぼ近似する様相を呈している。氷見市の藪田薬師中世墓[7]もやぐら状の施設であるが、この1号塔は火輪、水輪の形状において本遺構出土品より新しい様相を呈している。

地頭墳墓窟の群が室町時代[8]前期～中期、藪田薬師中世墓1号塔が室町時代中期の所産とされている。このことと遺物の時期を考え合わせると、本遺構の造営は室町時代の前期後半から中期にかかる時期と推定される。年代的には14世紀末～15世紀前半とみておきたい。

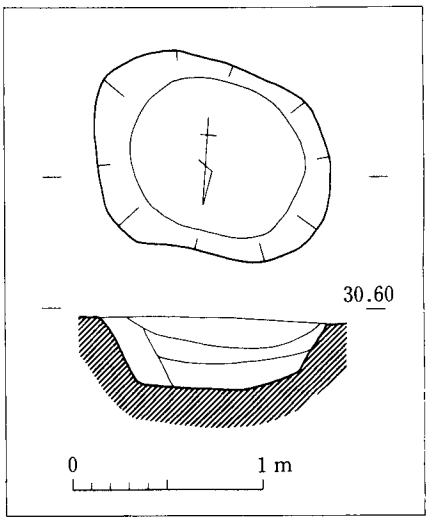
2　土坑・溝状遺構・ピット

概　観

調査区における遺構の分布はB区～E区にかけて多数のピットと溝状遺構群が検出され、約30m離れてH区～J区にかけて土坑・ピット・溝状遺構（以下溝と呼称する。）が検出された。

第1号土坑（第10図、図版第9）

2H区の北隅に位置し、墓地跡南西部隅付近で検出された。東西約70cm、南北約60cmを測るやや不整形な隅円方形を呈し、深さ約40cmを測る。覆土は上層では細分されるが基本的には薄茶褐色土層であり、最下層は暗茶褐色土層である。



第10図　第1号土坑実測図　1/40

出土遺物には土師器の坏、甕がある。（第14図1～7、図版第12）1は口径10.4cm、2は口径12.5cmを測り、両者とも体部にヨコナデによるゆるい稜を持っている。2は内外面とも剝離が著しい。4～7は有台坏の底部であり、回転糸切り後高台を貼り付けている。7は高台端部を指や棒状工具で押捺している。3は口径18cmを測る長胴甕であり、内外ともヨコナデ調整がなされている。

第1号溝（第6図）

1J区の中央西隅に位置し、東側は不明であるが幅60cm、深さ10cmを測る。平安時代の土師器片が出土している。

第2号溝（第11図、図版第5）

2I区のほぼ中央に位置し、墓地跡内をほぼ東西に走る平安時代の溝である。東側は調査区外に伸びているために不明であるが長さ5m以上、幅35～65cm、深さ約15cmを測る比較的浅い溝である。覆土は茶褐色土層である。溝の中には数個のピットがみられるが、深さ10～20cmの比較的浅いものである。

出土遺物には土師器の底部がある。（第14図8、図版第12）底部を回転糸切り後に1.5cmの比較的高い高台を貼り付けている。高台端部にはヘラ状工具による刻み目が3ケ所残っており、復元すると5ケ所に施されていたようである。

第3・4・5・6号溝（第12図、図版第8）

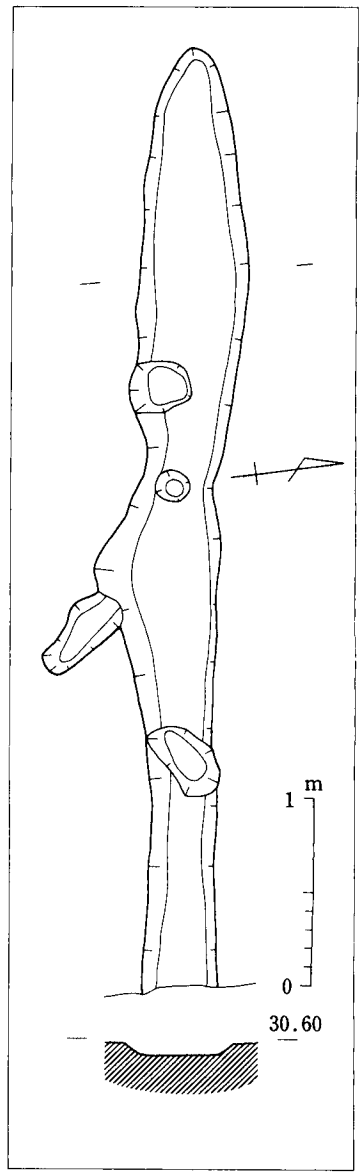
2D区北半～2E区中央にかけて位置する。第5号溝以外は主軸をほぼ南北にあわせている。第3号溝は長さ4m、幅50cm、深さ10cmを測る。第4号溝は第3号溝の西約1.5～1.7mに位置し、長さ4.9m、幅20cm、深さ10cmを測る。第5号溝は第4号溝と第6号溝の間に位置し北西方向にやや弓なりになる溝であり、長さ約2.2m、幅20cm、深さ10cmを測る。第6号溝は第4号溝の西約3.5～3.8mに位置し、北隅はピットにより切られているが長さ5.2m、幅25cm、深さ10cmを測る。第3号溝の南側1.2mには長さ2.8mの溝があるが第3号溝の一部である可能性もある。第4号溝

と第６号溝のほぼ中間に長さ２ｍ、幅24cm、深さ５cmの溝が存在する。これらのことから2D区北半～2E区中央にかけて約1.6mの間隔をおいて幅20cm、深さ10cmの溝が南北方向に４条掘られていたようである。

第３・４・５・６号溝からは少量ではあるが平安時代の土師器片が出土している。

第７・８・９・10・12号溝（第12図、図版第８）

2C区中央～2D区中央にかけて位置する。第７号溝は南側で途切れるが、ほぼ南北に主軸をとる。長さ8.8m、幅20～30cm、深さ10cmを測り、覆土は灰茶褐色土層である。第８号溝は第７号溝の西約1.8mに位置してほぼ併行して掘られている。長さ7.5m、幅20～40、深さ10cmを測り、覆土は灰茶褐色土層である。第９号溝は第８号溝の西約2.3mに位置している。南隅をP14に切られているが、長さ5.6m、幅20～40cm、深さ５～10cmを測り、覆土は薄茶褐色土層である。第10号溝は第９号溝の西約１mに位置し、主軸をやや西に向けており、約３分の１の所で二股に分かれている。長さ約10.4m、幅40cm、深さ10cmを測り、底には直径20cm、深さ約10cmのピットが存在する。覆土は薄茶褐色土層である。第12号溝は第８号溝と第９号溝の間に位置する。２ケ所途切れるが、長さ8.4m、幅20～50cm、深さ６～10cmを測る。これらの溝群は位置・主軸の方向・覆土の色調などから判断すると第７号溝と第８号溝（距離1.8m）、第９号溝と第10号溝の一部（１m）、第12号溝と第10号溝の主体（２～2.2m）の各々二条一組となるようである。しかし、各溝の主軸はほぼ南北にとっていること、覆土の色調が基本的には茶褐色であることなどから、時間差はあまりないものと思われる。



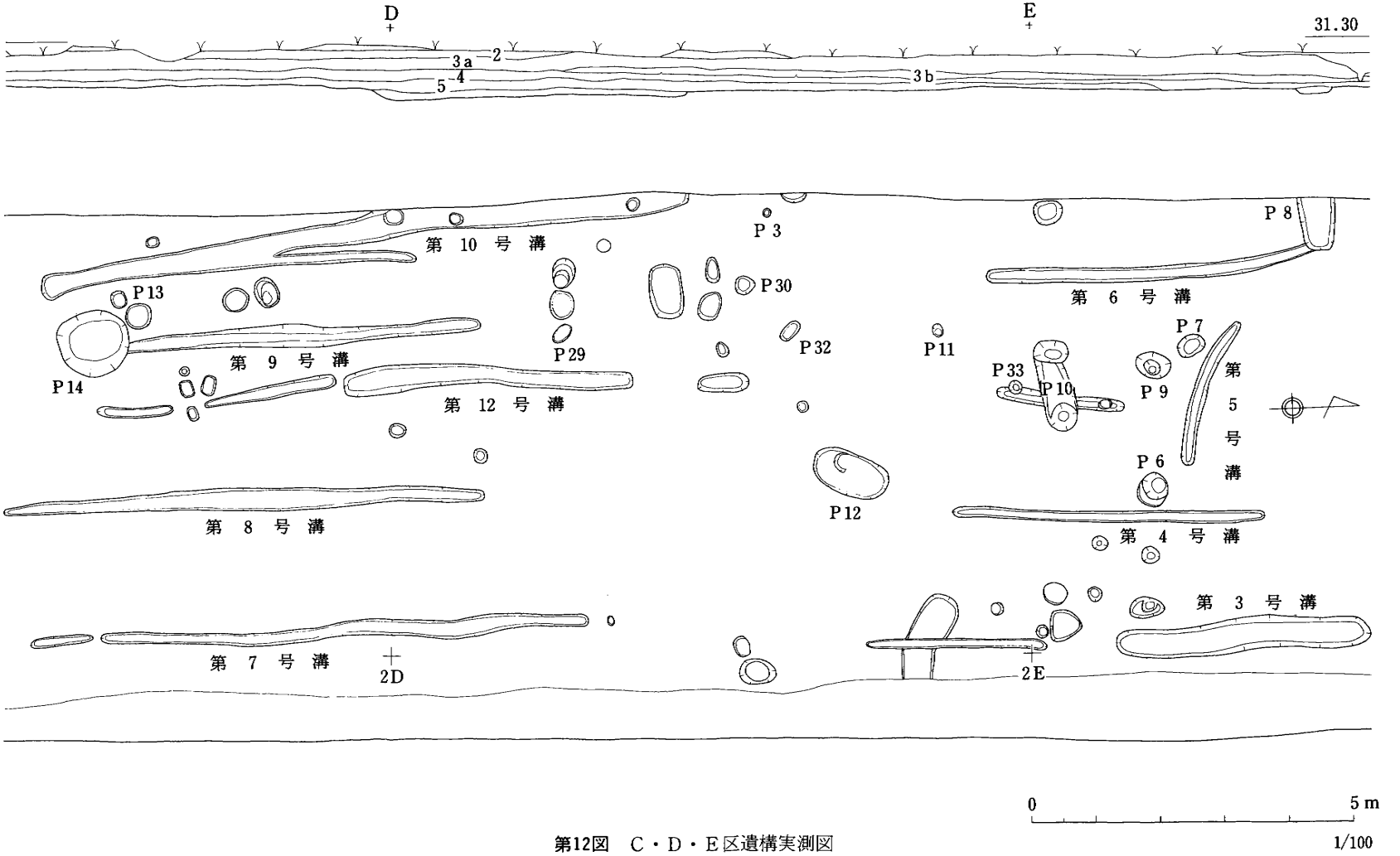
第11図　第２号溝実測図　1/40

各溝からは少量ではあるが平安時代の土師器片が出土している。

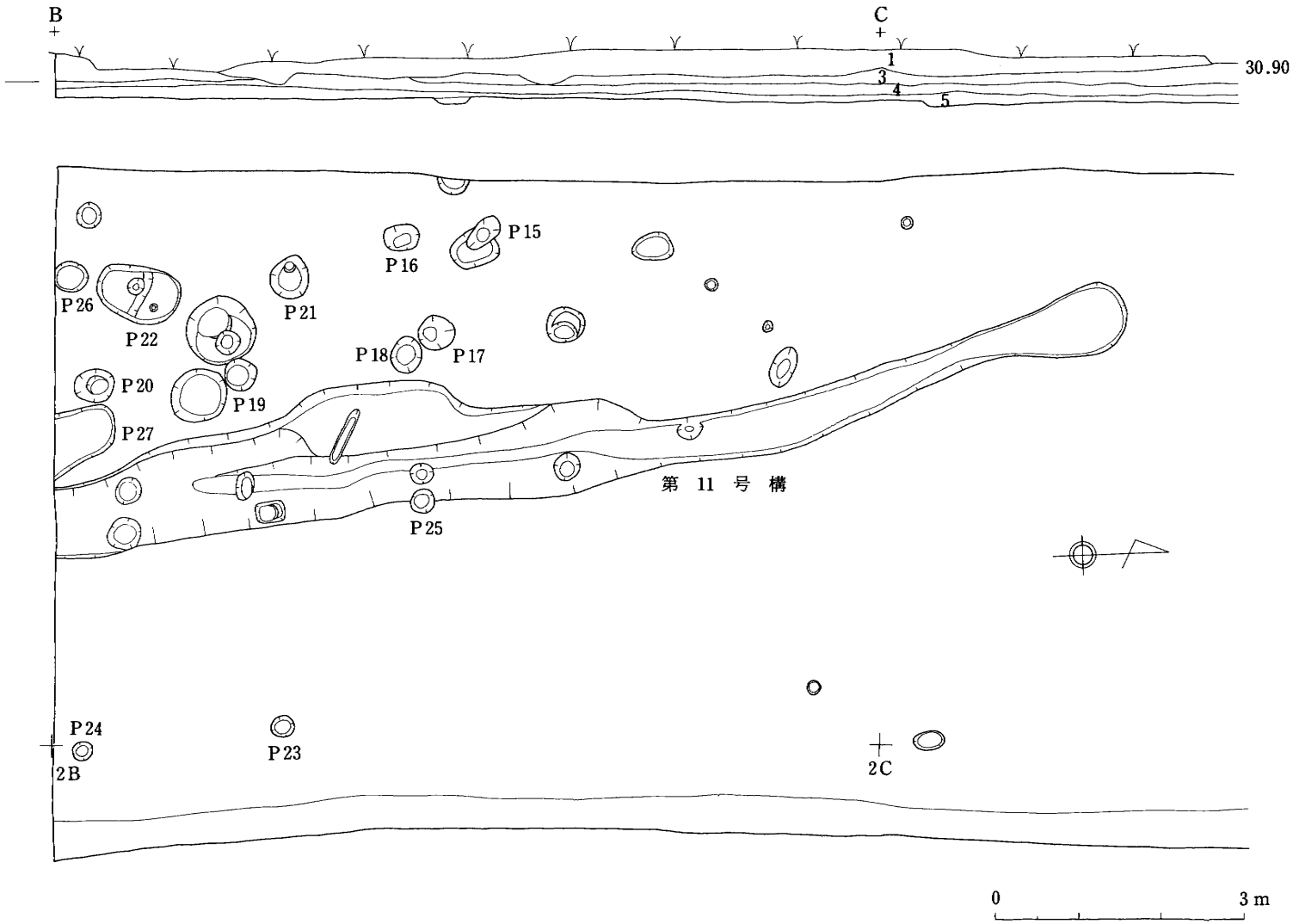
さて、幅10～30cm、深さ10～20cmの素掘りの小溝は水田耕作ないし畑作に関係するものとされている[9]。当遺跡の特徴として、１　主軸がほぼ南北を向き、同じ間隔をおいて併行して掘られていること、２　遺跡の端に位置すること、３　付近には他の遺構分布が希薄であり、その遺構が小さくて浅いものが多いこと、４　溝内から出土する遺物量が稀少であることなどがあげられる。これらの特徴から判断すると前説を否定する根拠はないようである。

第11号溝（第13図、図版第８）

2B区～2C区南にかけて位置し、主軸をやや西にとっている。B区の中央付近には浅いテラスを



第12図　C・D・E区遺構実測図



第13図　B・C区遺構実測図　1/80

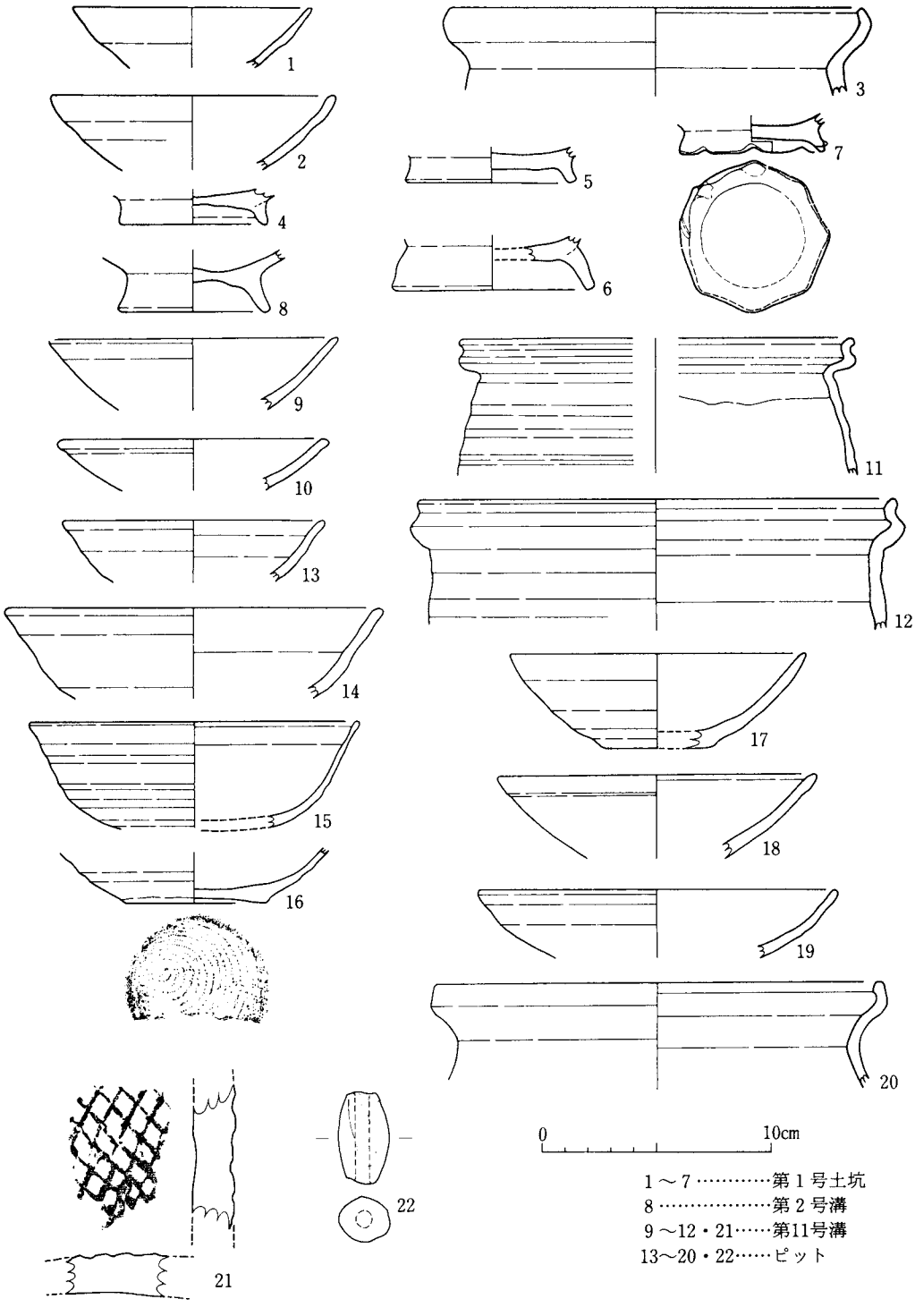
持っており、幅0.6～1.2m、深さ10～20cmを測る。南側は調査区外のため不明であるが、現存長13.2mを測る。底は浅く、なだらかに立ち上がり、東側には遺構検出面からの深さ30～40cmのピットが数個並んでいる。覆土は薄茶褐色土層である。

出土遺物には土師器の坏・長胴甕、瓦がある。（第14図９～12・21、図版第12）９は口径12.6cmを測り、胎土には砂粒を多く含んでいる。10は口径12cmを測る内面黒色の坏である。口縁端部をやや厚くし、丸くおさめている。11・12は長胴甕である。11は口径17.4cmを測り、やや胴が張り、外面はロクロを使用して指によるヨコナデ調整のために起伏をなしている。12は口径21cmを測り、外面はロクロを使用して幅広な工具によるヨコナデ調整がなされている。11・12は口縁形態から吉岡康暢氏の編年の第Ⅴ期[10]にあたり、10世紀後半に位置づけられる。21は現存長7.8cm、現存幅５cm、厚さ1.8cmを測る平瓦片である。凸面には対角線の長さ１cmと６mmの斜格子のタタキが施されているが、凹面は磨滅しているために不明である。胎土は0.5～１mm前後の砂粒をやや多く含む。色調は淡い肌色を呈し、焼成は悪くもろい。湯屋窯跡群のIII類にあたる[11]。

ピット

ピットは調査区に大きく三ケ所の集中がみられた。一つは第11号溝の西側に位置するグループである。深さ10cmぐらいの浅いものもみられるが全体としては深さ30～50cmのものが多い。ほとんどのピットからは平安時代中頃と思われる土師器片が出土している。もう一つは併行する溝群の中にみられるグループである。深さ５～10cmぐらいの比較的浅いものが多く、大部分のピットからは遺物は出土していない。最後は墓地跡内にみられるグループである。墓地跡内に位置するが、土器片や覆土から判断すると平安時代のものと推定される。深さは10～20cmのものがほとんどである。

出土遺物には土師器の坏・甕、灰釉陶器、土錘などがある。（第14図13～20・22、図版第12）13はP9から出土した口径11.6cmの内面黒色の土師器の坏である。14はP10から出土した口径16.6cmの坏であり、内外面には墨状の付着物がついている。15・16はP13から出土した。15は灰釉陶器の椀である。口径14.6cmを測り、内外面をヨコナデ調整した後に外面の体部下半にケズリ調整がなされている。釉は外面にはほとんどかかっておらず、内面は体部上半まで薄くかかっている。10世紀代に位置づけられよう。16は底部径6.2cmの土師器の坏であり、底部中央がややゆがんでいる。17～19・22はP14から出土した。17～19は土師器の坏である。17は口径13cm、器高4.2cm、底径５cmを測り、底部は回転糸切りがなされている。18は口径14cmを測り、内外面とも剝離が著しく、二次加熱を受けたようである。19は口径15.6cmを測る。22は土錘である。重さ15g、孔径は上８mm、下７mm、長さ4.1cm、幅2.3cmを測り、表面には指頭による調整痕が認められる。P22からは緑釉陶器の椀あるいは皿の小片が出土している。体部下半にあたり、内外面をヨコナデ調整後に外面をケズリ調整を行なっている。胎土は全く砂粒を含まず、しかも緻密である。釉は内外面とも施されている。20はP27から出土した長胴甕で口径19.6cmを測り、口縁部は内屈した受口状を呈す。



第14図　土坑・溝状遺構・ピット出土遺物実測図　1/3

3　包含層出土土器（第15図、図版第13）

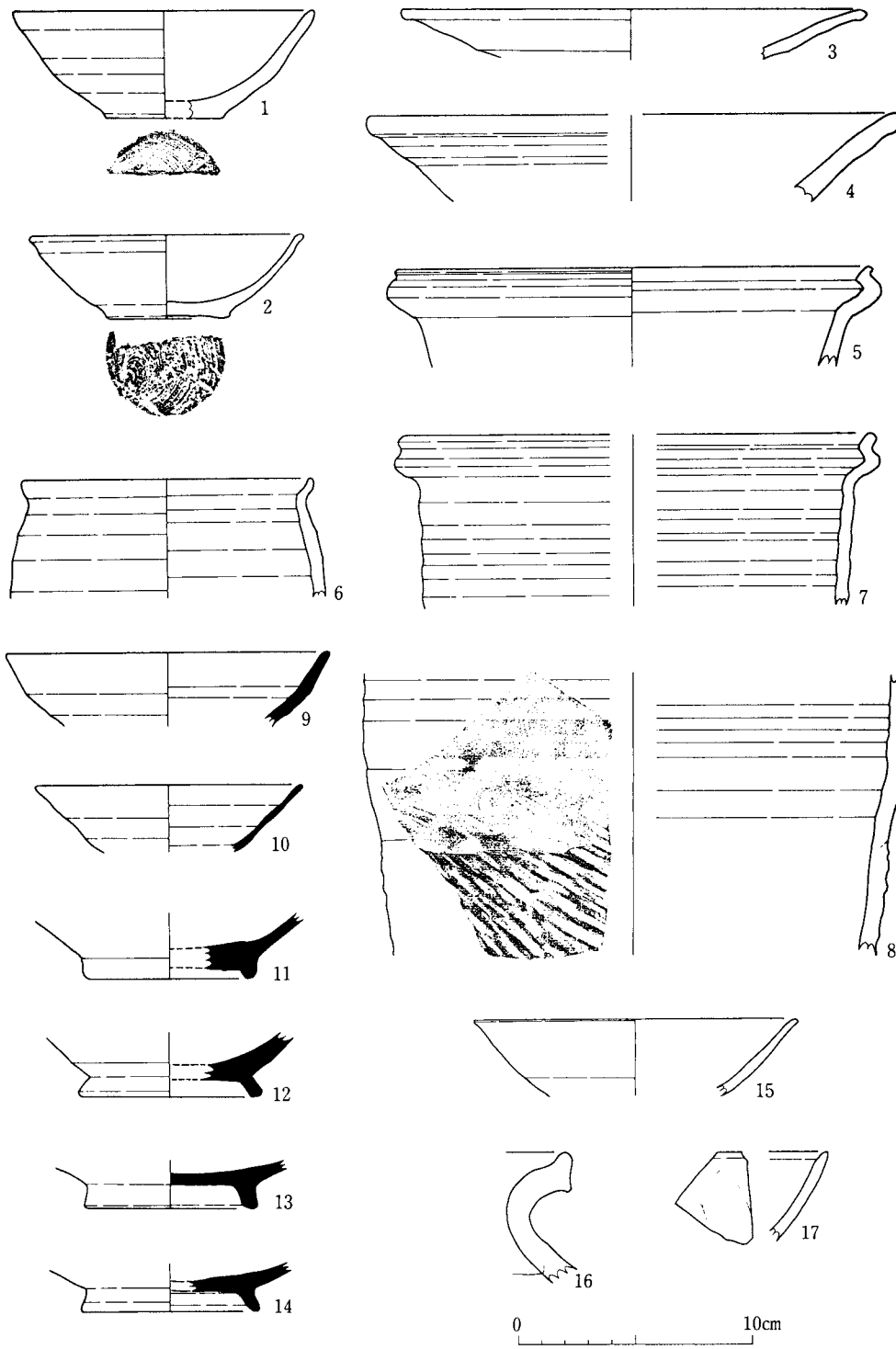
土師器　1・2は埦である。1は口径12.8cm、器高4.6cm、底径5cmを測り、内外面ともヨコナデ調整がなされている。2は口径11.6cm、器高3.6cm、底径4.9cmを測る。胎土は砂粒の混入は少ないが、長さ1cm大の小石を含んでいる。内外面とも磨滅しているが、ヨコナデ調整がなされている。3は皿である。口径19.6cmの大型のものであり、体部下半にケズリ調整がなされている。4の鍋は口径23cmを測り、口縁部が直線的に外傾している。5の甕はは口径22cmを測り、外傾する口縁部を強く内屈させ、口唇部を外側につまみ出している。10世紀後半に比定できよう。6は小型甕であり、口径12.4cmを測る。胎土はほとんど砂粒を含まず、内外面のヨコナデ調整も丁寧である。7・8は長胴甕である。7は口径20.6cmを測り、内外面ともロクロによるヨコナデ調整により凹凸をなしている。8は胴部最大径23.4cmを測り、胴部下半外面にタタキ調整がなされている。7は10世紀後半に比定できよう。

須恵器　9は体部中ほどにゆるい稜を持つ埦である。口径14cmを測り、色調は灰白色を呈し、焼成は良好である。内面の体部上半には重ね焼きの跡がみられる。10～12は坏である。10は口縁部が直線的に伸びており、外傾度は強い。体部にはロクロによるヨコナデ調整のためにゆるい凹凸をなしている。色調は灰白色を呈し、焼成は良好である。11は高台径6.9cmを測り、底部を回転糸切り後に高台を貼り付け、高台内に残った粘土をケズリ取っている。内底面は磨滅してスベスベしている。胎土は0.5～2㎜前後の白色粒子と黒色粒子を多く含み、色調は灰白色を呈し、焼成は良好である。12は高台径7.8cmを測り、体部下半にケズリ調整がなされている。13•14は皿である。13は高台径7.4cmを測り、底部は回転糸切り後高台を貼り付け、端部の内側を面取りしている。高台貼り付け後底部全体に軽くヨコナデが施されている。胎土は0.5～2㎜前後の砂粒を多量に含み、色調は灰色を呈し、焼成は良い。内面の体部下半には重ね焼きの跡がみられる。14は高台径7.8cmを測り、底部を回転糸切り後にやや外側に開く高台を貼り付け、端部の内側に面取りを行なっている。11以外は10世紀中頃～後半に位置づけられよう。

灰釉陶器　15は口径14cmを測る埦である。体部下半にゆるい稜を持ち、口縁端部を少し外側につまみ出している。釉は淡い黄色を少し含む灰色であり、外面はゆるい稜まで、内面は体部上半まで均一に施されている。胎土はほとんど砂粒を含まず、色調は灰白色を呈する。他に図化し得なかったが3点出土している。

加賀陶器　16は2J区から出土した甕の口縁部である。口縁部上端を大きくつまみ出し、下端はほんの少しだけつまみ出している。胎土は1～3㎜大の砂粒を少し含むが稠密である。内外面ともヨコナデ調整がみられるが、内面には粘土紐の輪積痕がみられ、指によるナデ消しが行なわれている。加賀陶器の編年[12]によれば第III期（13世紀後半～14世紀初）に比定できよう。

青磁　17は2F区から出土した碗である。幅約2cmのしのぎ蓮弁を片切り彫りで描いている。釉は緑がかった灰色であり、薄く施されているが、透明感に欠ける。年代は13世紀末～14世紀に位置づけられよう[13]。



第15図　包含層出土土器実測図　1/3

註

(1) 西野秀和・垣内光次郎他『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡（II）』　石川県立埋蔵文化財センター　1985　金沢。

(2) 垣内光次郎氏から教示を得た。

(3) 吉岡康暢「珠洲古窯跡」『珠洲市史』　第一巻　珠洲市役所　1976　珠洲。

(4) 藤澤良祐「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁』　第8号　東洋陶磁学会　1982　東京。

(5) 高堀勝喜・荒木繁行・福田弘光・吉岡康暢・櫻井甚一・浅香年木『普正寺』　石川考古学研究会　1970　金沢。

(6) 櫻井甚一・唐川明史「地頭町中世墳墓窟」『富来町史』続資料編　富来町役場　1976　石川県富来町。

(7) 酒井重洋・岡本恭一・竹越善和『藪田薬師中世墓発掘調査報告所』　氷見市教育委員会　1985　氷見。

(8) 本書では政治史上の区分により南北朝時代および戦国時代を含め室町時代と呼ぶ。

(9) 今尾文昭「中世素掘り小溝についての一解釈」『青陵』　第47号　奈良県立橿原考古学研究所　1981　橿原。

(10) 吉岡康暢「奈良平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』　松任市教育委員会　1983　松任。

(11) 木立雅朗氏から教示を得た。

(12) 上野与一・小村茂『加賀古陶』　ニュー・サイエンス社　1984　東京。

(13) 上田秀夫「14～16世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』　NO.2　日本貿易陶磁研究会　1982　福岡。

第4章　考　　察 ―墓地跡の評価をめぐって―

第1節　はじめに

石川県内における中世墓の調査例は近年その数を増している。そのうち石造遺物を伴った例としては、羽咋郡富来町地頭墳墓窟[1]、同志賀町坪野墳墓群[2]、鹿島郡中島町上町マンダラ遺跡[3]、七尾市細口源田山遺跡[4]、金沢市普正寺遺跡[5]、石川郡鶴来町白山町墳墓遺跡[6]、能美郡辰口町湯屋チョウヅカ遺跡[7]、小松市軽海中世墓跡[8]があげられる。これらはいずれも立地や形態などの構成要素が多様で、一律に考えることは困難である。その分類に関しては西野秀和氏や垣内光次郎氏の研究[9]があるが、体系化されるに到っていない。西野氏の指摘されるように考古学的に中世を構成する諸要素と文献の相互補完的研究が急務であろう。

石造遺物の研究は櫻井甚一氏（石川考古学研究会会長）に負うところが大きい。同氏は昭和33年に県内の板碑研究を『能登・加賀の板碑文化』としてまとめられ、その後も昭和40年の鳳至郡穴水町明泉寺鎌倉屋敷での永享三年銘五輪塔の調査[10]をはじめ普正寺遺跡、地頭墳墓窟の調査で成果を公表[11]されている。羽咋市丹治山福水寺遺跡の調査[12]では五輪塔の変遷について考察されている。また紀年銘のある石塔については『石川県銘文集成』に悉皆的に収載されており、研究者の便がはかられている。石造遺物の宝庫である石動山の資料については『鹿島町史』に収載が予定されており、刊行がまたれる。

第2節　周溝をもつ中世墓について

標題の調査例は近年その数を増している。本節では類例の検討をもとに構造的な面から考究したい。ただし、類例の選定にあたっては、その変遷過程をみるため、前後の時代に属するものも含めた。

これに先立ってまず、本遺跡墓地の構造的復元を行なっておきたい。

一辺をほぼ東西・南北に合わせる約10m四方の墓地である。北西隅の間隙は出入口としての機能を想定できる。石塔は9基以上造立されており、方形部の西辺から左まわりに造塔がなされたものと推測できる。中央部の土坑には大型蔵骨器が埋め込まれており、他の場所で荼毘に付された火葬骨を複次にわたって埋葬したものである。ただ、周溝中の炭化物層（火葬骨片入）の存在は、例外的に、火葬がなされた可能性を想定させる。

さて、標題の例であるが、本遺跡を含めて西日本を中心に第3表の通り14遺跡15例を掲げた[13]。表ではこれらを埋葬方法や形状などの諸要素によって分類した。分類にあたって大前提としたのは火葬であるか否かということである。なぜなら、この点に葬法および葬送意識の大きな変革が

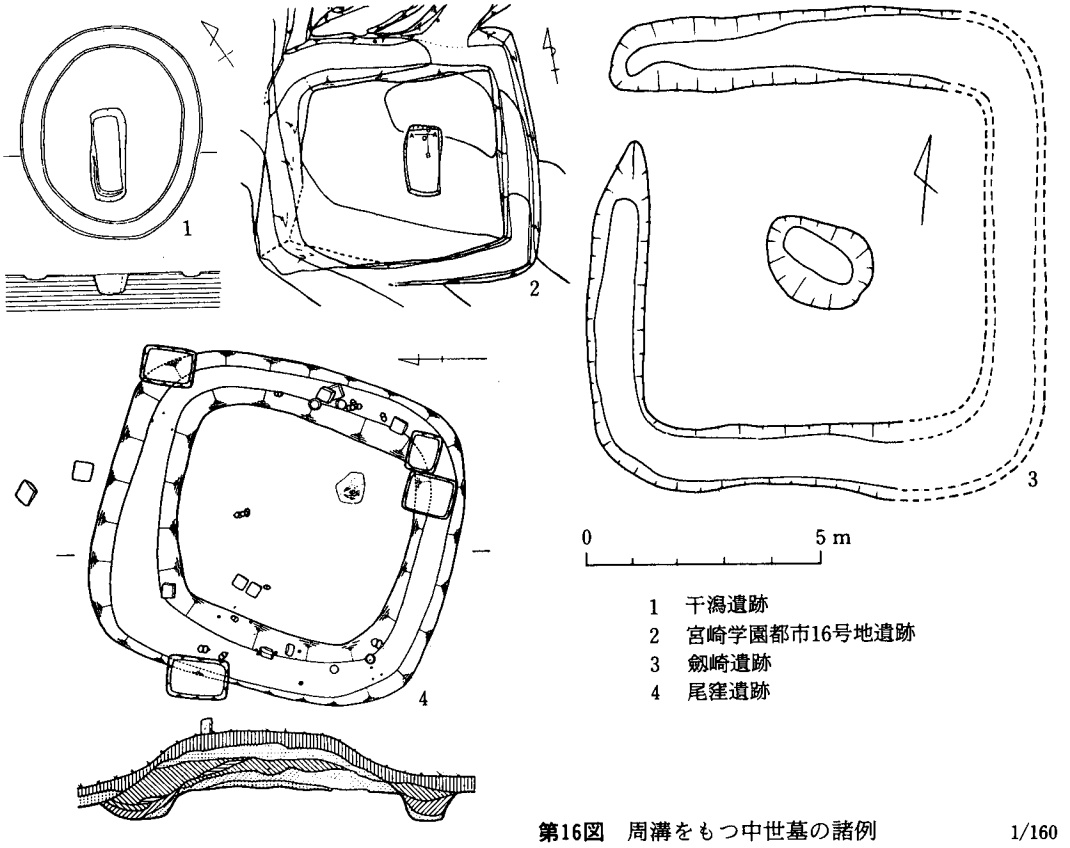
あると考えるからである。

A類　本類は単数の遺体を伸展状態で土壙(主体部)中に埋置したものである。木棺の使用が指摘されている例もある。

A_1 類は周溝の形状が円あるいは楕円形を呈するものである。占有面積は15m²前後で、小円墳よりひとまわり小さい。溝幅は35～50cmである。時期的には平安時代に限られ、干潟例は10世紀中頃に比定されている。なお土壙の位置は上の原や干潟例では必ずしも中央部に軸をそろえていない。両遺跡では木棺の存在が指摘されている。

A_2 類は周溝の形状が方形を呈するものである。占有面積は30m²をこえ、柳田例にいたっては170m²に近い。したがって溝の幅も60～130cmと A_1 類に比べて広い。主体部の位置は宮崎学園都市例が中央部より東に寄り、柳田例は主軸が合わない。これらは A_1 類の例でも見られたことだが、主体部の構築が溝の掘削に先行した結果でなかろうか。また、柳田例の主体部は自然石によって築かれた竪穴式石室状を呈しており、例を見ない。北牟田例では木棺による埋葬が考えられている。各遺跡とも14～15世紀の所産と見られている。

B類　本類は火葬骨が検出されたた例で、しかもその埋葬がなされたと考えられるものである。溝の形状は方形である。占有面積は20m²をこえ、溝の幅は広い部分で1mをこえる。本遺跡は約100m²を測り広さが際立っている。また標識的遺物として石塔が存在する。本遺跡では中央部に不



1　干潟遺跡
2　宮崎学園都市16号地遺跡
3　劔崎遺跡
4　尾窪遺跡

第16図　周溝をもつ中世墓の諸例　1/160

第3表 周溝をもつ中世墓分類表

▒ 要素として存在するもの

No.	構成要素 / 遺跡名 / 所在地	形状	規模 法量(m)	規模 面積(m²)	外部施設 標識 封土	外部施設 標識 五輪塔	外部施設 標識 寶篋印塔	外部施設 標識 その他石塔	内部施設 埋葬方法 土葬	内部施設 埋葬方法 火葬骨	報告の所見など	分類		文献(註13)
1	上の原（熊本県） 下益城郡城南町塚原		4.4×3.3	15					▒		平安時代前半～中葉 木棺	A	A1	a
2	鏡原 福岡市大字飯氏		3.95×3.65	12					▒		平安時代末 周溝内に石あり			b
3	干潟（福岡県） 小郡市大字干潟		4.41×3.70	13					▒		10世紀中頃 木棺			c
4	宮崎学園都市16号地 宮崎市大字熊野		5.9×5.4	32					▒		14世紀末～15世紀初頭		A2	d
5	北牟田2号（福岡県） 小郡市三沢		6.0×6.5	39	▒				▒		15世紀頃 木棺か			e
6	柳田（富山県） 下新川郡朝日町柳田		13.5×12.5	169	▒				▒		鎌倉～室町時代 もと約2mの封土あり			f
7	飯崎（石川県） 松任市飯崎町		10.0×(9.8)	98		▒	▒			▒	14世紀末～15世紀前半	B		本書
8	小杉上野II号台地（富山県） 射水郡小杉町上野					▒				▒	中世～近世 石仏あり			g
9	上野（京都府） 福知山市字石原		4.6×4.6	21	▒					▒	中世 周溝内に石			h
10	朝日山46号（福井県） 丹生郡朝日町朝日		5.0×5.0	25	▒	▒				▒	中世 削り出しの墳丘			i
11	尾窪58A号（熊本県） 下益城郡城南町尾窪		7.15×5.1	36	▒	▒					鎌倉～室町時代	C		j
12	長岡京跡SX13002（京都府） 長岡京市天神		2.7×2.5	7				▒			11世紀末～12世紀初頭			k
13	東庄内B（三重県） 鈴鹿市東庄内町		6.0×5.3	32						▒	鎌倉時代頃 上屋あり			l

整な土坑が存在し、上野例では集石があることから土坑の存在した可能性がある。他の2例では土坑は見られない。朝日山例では北溝に垂直の位置で二条の石列があり、墓道と考えられている。時期については各例とも遺構についた資料が少なくその決定を困難にしているが、中世〜近世とする小杉上野例を除いては、中世という時代のなかで捉えられている。

C類　埋葬の形跡はないが石塔が見られるものである。溝は方形にめぐる。尾窪例は36m²を占有し、周溝幅は広いところで150cm以上を測る。周溝内より多数の五輪塔が出土しており、方形部より転落したものと見られている。鎌倉〜室町時代の所産と考えられている。長岡京例はこれに比べて小規模である。面積は約7m²で、周溝から寶塔の相輪と土師器の皿が出土している。寶塔は古相を示し、寶塔を立てた墳墓としても初源的なものと考えられる。11世紀末〜12世紀初頭の年代と考えられている。報告のなかでは埋葬の形跡は窺えないが、元来封土をもった墳墓であり、南側を拝所としていたと推定されている。この可能性を容認すれば本例はA類かB類に含まれることになるが、時期的な観点からは A_1 類に含めることが妥当であるかも知れない。

その他　周溝をもつ火葬場跡の例として東庄内B遺跡がある。方形部内の中央に不整円形の土坑をつくり、四隅にピットを配している。このことは土坑上に上屋が存在していたことを示し、土坑の特徴より、火葬場として機能していたことを窺わせる。鎌倉時代頃と推定されている。類例を見ない。また、方形の周溝をもちながら埋葬の形跡も石塔の造立も窺えないものがある。小杉上野遺跡第Ⅰ台地例では中央部に焼土痕があり、富山市の杉谷H遺跡[14]では広い面積を占め、溝内より多量の礫が検出された。民間信仰にともなう「塚」の封土が失なわれたものとみることもできるが、類例の増加にまつしかない。

つぎに墓地を構成する諸要素を、外部施設、内部施設（埋葬施設）、副葬品の三者に分けて考えてみたい。

外部施設には溝、封土、石塔がある。

溝の形状は円形から方形に変わり、ここに截然とした時期差を見いだしうる。変化を裏付ける根拠を持たないが、占有面積の拡大とともに意識上の変革があったことは否めまい。掘削の目的は墓であるが故に、まず結界としての機能を付与したものと考えられる。しかし、排水[15]としての副次的な目的もあろう。本遺跡の溝が北西隅において切れているのは、結界された墓地として現世と厳しく峻別さるべき対象から、複次にわたって複数の埋葬を行なう、集団的でありしかも共葬的な墓地への転換の萌芽と見ることができようか。さらに観念的な思考に立ち入ることは避けたい。

封土は現況では確認できない例がある。遺跡の立地や遺存状況にもよるが、溝の掘削とも関わって、高低の差こそあれ本来は封土をもったものが大部分であった[16]と推定する。尾窪例では盛土で構成された高さが1mをこえ、その目的は周溝とも相まって高さを標示することにあり、標識としての機能を与えられている。

石塔は封土の上に立てられたものである。調査例ではすべて原位置をとどめていない。この造立が標識としての目的を担っていたのは勿論であるが、埋葬時より墓塔として標示されたものと

追善供養として造立された二者が存在するようである。[17]。木製塔姿は遺存例がない。ただし、少なくとも平安時代末期に存在しており、石塔と同時に立てられていたことも知られる[18]。また、本遺跡では7基の五輪塔に対して寶篋印塔が2基と少ないのは、各々に付与された意義の相違を物語るものであろうか。外見的な差異が大きいだけに同じ目的意識のもとに造立されたとは考えにくい。五輪塔と併存してしかも原位置をとどめる例を詳細に検討する必要があろう。

内部施設はA_1類に見られる伸展土葬用の長方形土壙とA_2類の柳田例に見られる竪穴式石室状の施設およびB類の本遺跡に見られる不整形の大型蔵骨器納入を可能にする土坑である。前二者は単独墓であり、後者は共葬墓である。前二者の遺体は木棺に納められていた例を知りうる。木棺は遺体の収納容器であるとともに埋葬場所(墓地)あるいは火葬場所への運搬容器として機能している。

副葬品を知りうるのはA類に限られる。上の原では土器4点の他に鉄製紡錘車が出土している。鏡原、干潟では土器のみである。A_2類の宮崎学園都市例では土師質土器の他に漆器、銅銭が出土している。A_1類とは質的な相違を見せるが、概して豊富ではないという点で共通する。

以上、周溝をもつ中世墓を分類し、その構成要素を瞥見した。調査例の抽出が不十分[19]であるのは否めないが、さらに地形的立地や遺構全体のなかでの立地の検討、併行期における葬法総体のなかでの位置づけを行なう必要性を感じる。

なお、抽出例の遺構全体のなかでの立地は中牟田例を除いて独立的である。尾窪では土壙墓群の中央に占地するのが注目される。

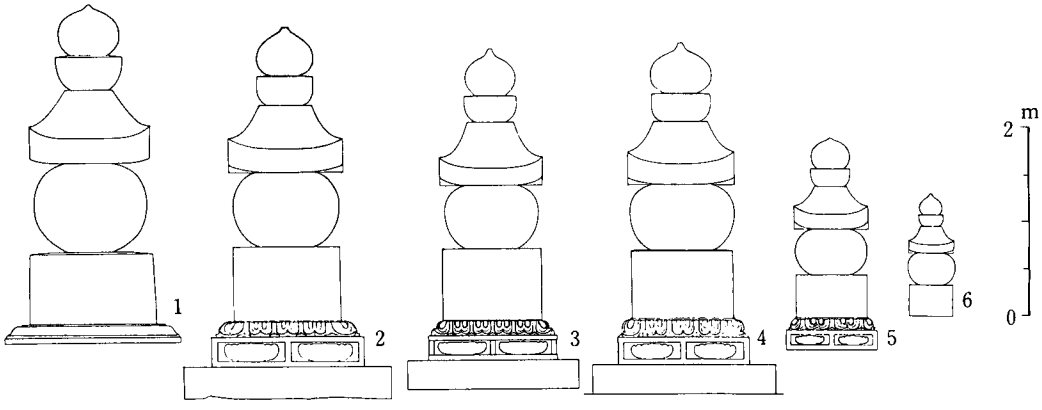
第3節　五輪塔の変遷について

五輪塔の時期および変遷を考えるさい、まずそれが完形塔であるという条件が前提となる。しかし、この条件に耐えうる資料はまれである。野外に長期間おかれた塔は転落するのが必然であり、複数基あるものは、復元されたとしても本来の組合せにならないことが多い。発掘調査によって得られた資料はこの遺物固有の性格により、比定をさらに困難にしている。

加賀・能登における五輪塔の変遷については櫻井甚一氏の考察がある[20]。本節で述べようとすることの大半は同氏の見通しに依拠しているが、筆者は各個について観察したわけではないので、誤謬が生じているとすればその責は筆者にある。

日本における最古の五輪塔は平安時代末期のものとされている[21]。しかし、加賀・能登においては同期の例は確認されておらず、現在のところ鎌倉時代に比定されるものが最古である。本節では、加賀・能登・越中において前記の条件を具備するものを抽出して、形態的な変遷にふれたいと思う。

身近な例について考える前に、奈良および鎌倉に所在する完形塔を瞥見してみよう。第17図に示した6基[22]は完形塔としてほぼ疑いのないものである。1が奈良市、2～6が鎌倉市所在である。1は西大寺の叡尊塔、2は浄光明寺塔、3は極楽寺忍性塔であり、鎌倉末期の典型的な五輪



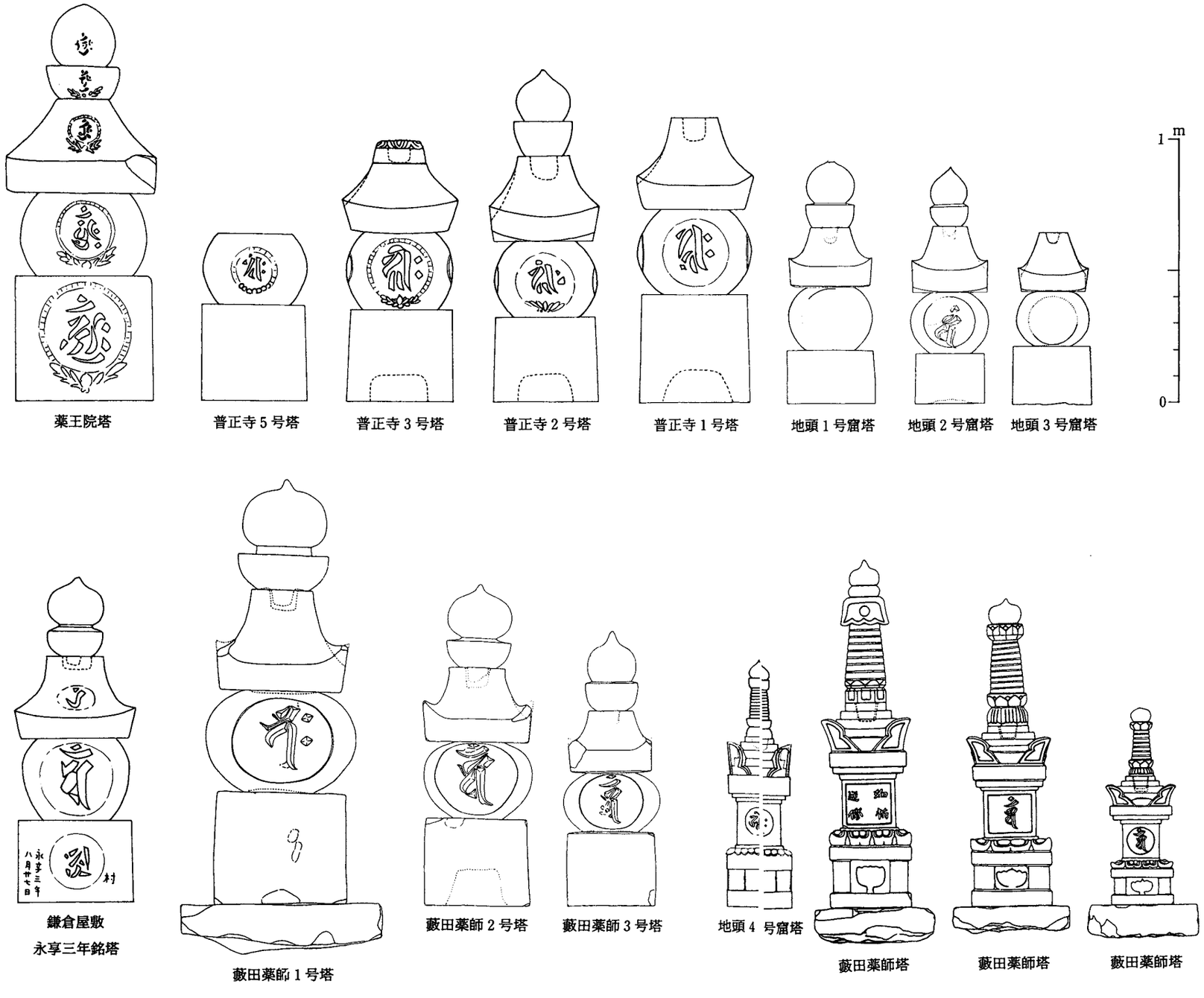
第17図　奈良・鎌倉所在の五輪塔実測図（『浄光明寺五輪塔修理工事報告書』より）　1/8

塔の形態が窺える。4は極楽寺忍公塔で、水輪の圧縮化が見られ、この段階よりバランスの崩れが指摘されている。5は極楽寺延慶3年銘塔、6は西方寺址第4塔である。前者において空輪の形態変化、水輪の圧縮化傾向が窺える。以上の6例は13世紀末から14世紀前半にかけての所産とみられている。

さて、以上の観察をもとにして本題に入ろう。薬王院塔[23](加賀市山代温泉所在)は最安寺塔群[24]（鳳至郡能都町西安寺所在）とともに県内において最も古く位置づけられている。総体的には重厚なつくりをみせる。しかし、全高に占める地輪の高さ、水輪の低さ・幅のせまさが目立っている。水輪は最大径をやや下位におく。火輪の屋根はほとんど反らない。軒は厚く、軒口は垂直である。空輪は寶珠形が崩れ、栃の実形を呈する。各輪に彫られた五点具足の梵字が特徴的である。奈良・鎌倉例と対比すると全体的なバランスが大きく異なる。奈良・鎌倉例の地輪の全高に占める比が約25％であるのに対し、本例は30％を示す。水輪のバランスも異なるが、圧縮化は鎌倉時代末頃からみられる特徴である。火輪も屋根の反りがほとんどみられず相違をみせる。軒口が垂直な点は近似する。相違点を地域相とみるか時期差とみるかは、近隣の資料を更に検討することにより解消されよう。

普正寺塔群[25]は普正寺遺跡より出土したものである。普正寺5号塔は完形塔ではないが、該期の資料が少ないので提示した。地輪は縦にのびている。水輪は圧縮されており、最大径をほぼ中位におく。薬王院塔に続くと考えられている。

普正寺3号塔は地輪がやや横長で、上端を少しせばめる。水輪は丸く、最大径をやや下位におく。火輪は軒口がななめに切れる。5号塔の火輪の形状が不明であるが、鎌倉時代以来の垂直に切れる軒口の形状が、ここで変化をみせている。また、高さが軒幅に近くなる。上部に複弁反花の露盤装飾を施し、その下に横線を刻むのは特徴的である。本塔の他に、4号塔、6号塔でもみられる。櫻井甚一氏の調査[26]によると金沢市二ツ寺町墓地、同普正寺町墓地、同町八幡神社境内、石川郡鶴来町浄養寺境内、羽咋郡押水町土田山墓地、鳳至郡穴水町の明泉寺鎌倉屋敷墓地で存在することが判明しており、本遺跡でも1点出土している。また、横線のみ刻むものが劔崎テラバ



第18図　加賀・能登・越中の五輪塔・寶篋印塔実測図および略図　　1/20

ンバ遺跡[27]より出土している。(第21図)とりわけ北加賀におけるあり方が手取扇状地の扇頂―扇央―扇端を結ぶかたちで存在するのは石材の産地や加工地などとの問題ともあわせて考究すべき課題である。

普正寺2号塔は3号塔と地輪・水輪の形状は基本的に同じであるが、火輪の軒幅が狭くなり、縦に細くなる傾向がみられる。空風輪も縦長化をみせる。全体的なバランスは良い。

普正寺1号塔は2号塔より新しく位置づけられている。地輪の縦、横はほぼ等しい。水輪は球形で、梵字の筆勢は弱い。火輪は2号と同じく上にのびて細くなるが、ななめに切れた軒口は上端のみ突出する。3・4号塔の軒が等しい厚さをもって反るのとは異なり、端部のみ厚さを増す。この点が以後につづく特徴的な様相である。

普正寺塔群は1・2・3号の地輪の下部に方形の抉り込みが見られるのが特徴的である。

地頭墳墓窟塔群[28]は全高90cm前後を測る中型品である。いずれも地輪は全高の22%と平たく、水輪は偏球化し最大径をいくぶん上位におく。火輪は普正寺1号塔と同様軒端を突出させる。屋根は急であり軒口はななめに切れる。

明泉寺鎌倉屋敷の永享三年銘塔[29]は地輪が横長で、左に縦書きで「永享三年　八月廿七日」右に「村」の字が陰刻されている。水輪は最大径を上位におく。火輪は軒下端が水平で、軒口をななめに切り、軒端を上に突出させる。屋根はきつい。空風輪のほぞに対して火輪のほぞ穴が大きすぎるため別個体ではないかと考えられている。本塔の下より珠洲陶器四耳壺の蔵骨器が発掘されており、珠洲陶器編年のさいの基準資料[30]となっている。鎌倉屋敷の石塔は積み直されたものが多く、本塔もその可能性は否定できず、組合せについては再検討を要しよう。

藪田薬師塔群[31]は富山県氷見市藪田字薬師に所在する。藪田1号塔は大型で各部位に強い退化傾向をみせる。地輪の幅は高さよりやや大きい。水輪は最大径をやや上位におき、その径は地輪、火輪の幅を凌駕している。扁球形を呈する。火輪は軒口をななめに切り、軒端を上に大きく突出させる。屋根は急である。空風輪はその接点が溝状になり、本来の形状を失っている。ただ、全体的なバランスはよい。2号塔の水輪径は地輪、火輪の幅にほぼ等しい。空風輪の接点には1号塔ほど大きな溝をつくらない。3号塔の水輪も1号塔と同様、径が大きく、最大径を上位におく。また、肩が張っている。火輪は小さく、空風輪は大きい。

以上、12点の資料を概観したのであるが、それらについて段階的整理を試みると次のようになる。

第1段階　鎌倉的様式を伝えつつも各部位に退化傾向が窺える。地輪が縦長化し、水輪が扁平化にむかう。火輪の軒口は垂直である。薬王院塔、普正寺5号塔をこの段階におくことができる。なお、最安寺塔群も本段階のものとみれるが、一部に新相[32]が窺える。

第2段階　水輪は球形で、火輪は軒口がななめに切れ、高さを増す。空風輪も縦長傾向にある。彫られる梵字の筆勢は弱くなる。普正寺3号塔および2号塔をこの段階におくことが可能である。

第3段階　水輪の肩が張り、最大径が上位にくる。火輪は軒口をななめに切り、軒端を上に突出させ装飾化傾向をみせる。屋根は急である。空風輪は縦に長く、空・風の接点に溝状の間隙を

生ずる。普正寺1号塔、地頭墳墓窟塔群、鎌倉屋敷永享三年銘塔を本段階のものとしておく。なお地頭墳墓窟の寶篋印塔も本段階に属するものとみられる。

第4段階　旧来の形状を失ないつつある各部位がいよいよ退化傾向を強め、装飾化に走る段階である。水輪のバランスが崩壊し、火輪はさらに軒端部の突出を顕著にする。空風輪も間のびする。藪田薬師塔群を本段階のものとしたい。また、同遺跡の寶篋印塔群もここに属するものとみたい。

第5段階　図には提示していないが永享三年銘塔を除く、紀年銘をもつ一群をこの段階のものと考えたい。文明年間のものが4基（文明2年・5年・16年・18年）と永正18年（1521年）のもの1基が知られている。全体に小型化しているが、在銘塔をみる限りでは地輪は横長で安定的である。

この段階的整理にもとづいて本遺跡出土資料をみてみよう。まず水輪であるが扁平化や円相のゆがみがみられ、彫られた梵字の筆勢は弱い。火輪は縦長化へのきざしをみせ、軒端部がわずかに突出をみせる。複弁反花の露盤装飾は普正寺3号塔例に近似する。しかし、彫りはややあさい。空風輪でも縦長化がみられ、空輪は寶珠形が崩れつつある。これらの特徴より本遺跡出土資料を第3段階に含みうるものとして理解しておきたい。また、寶篋印塔についても、隅飾突起が直立する形状により、地頭墳墓窟4号窟塔より古相を示すものと考えられるが五輪塔と同段階の所産と考えたい。

各段階の年代比定については有力な根拠をもたない。ただ、第1段階の一群を鎌倉時代末期の様式を継承するものとして理解するならば、その年代を14世紀前半代とすることができよう。また、第4段階の藪田薬師塔群のうち最も新しいと見られる3号塔が15世紀代を下ることがないとみられており[33]、この段階を15世紀代のものと理解しておきたい。

ここでは第1段階・第2段階を14世紀前半～14世紀末、第3段階を14世紀末～15世紀前半、第4段階を15世紀前半～15世紀後半、第5段階を15世紀後半～16世紀前半の時期とみておきたい。

ここに示した変遷はわずか12例のなかでの傾向であり、また、段階ごとに截然と区別できるわけではない。これを少なくとも北陸における五輪塔総体の動きとするには、完形塔や在銘塔資料を集積し、鎌倉や奈良に所在する塔との比較をすすめるなど更に検討[34]を重ねる必要があろう。

第4節　被葬者の問題

本節では中世村落における階層構成を考えることによって被葬者の実像に近づきたいと思う。

まず、墓地の営まれた14•15世紀の歴史的環境を考えてみよう。「劔崎」の地名がはじめて文献にあらわれるのは近世に入ってからである。周辺地域をみると14世紀には幸明（こうみょう）・村井・長島・田地などの地名があらわれ、15世紀には倉光・開発（かいほつ）・島田などが知られる。また、主要な郷・荘・保の分布をみると本遺跡の北に倉光保、南に安吉（やすよし）保の名が知られる。ただ、倉光の地名は、平家物語、源平盛衰記にその領主の名があらわれることにより12世紀末まで遡りうるという。また、安吉保は文献上の初出は寛正5年（1464年）である。両保の中心をそれぞれ現在の松任市倉光町と

同安吉町付近に比定すると、本遺跡までの距離はともに約800mである。ただ、水系的にみれば本遺跡は山島用水系に属すると考えることができるため安吉保に含まれるとする考え方も可能である[35]。

中世の村落における階層構成については次の二つの例によっておおよそが知れる。

能美郡得橋(とくはし)郷は、現在の寺井町牛島(うしじま)を中心とする地域で、南禅寺領の荘園であった。本郷である牛島と他二村および三名より成り、本郷では12名の名主と83人の作人が存在していたことが知られている[36]。浅香年木氏によると、この郷では名主層は比較的大きな屋敷を構えて散居的に定住し、小百姓層は領主に従属して不安定な経営を続けながら、村落の生産活動の中核に位置づけられていたということである。そして、同氏はこのような状況が中世後期初頭における「加賀平野」において広汎な展開をみていたと推論されている[37]。

中世農民の資財の質や量から階層の解明に迫ったものに黒田日出男氏の研究がある[38]。同氏によると次の三階層に分けられている。第一に、器用の百姓とか有徳の百姓とかいわれた上層の名主百姓層、次に中規模の経営をもつ一般名主百姓層、そして小百姓層である。

各層に特徴的なことをいくつかあげてみよう。まず、上層の名主層はほとんど農具を所有していないが、家具・什器は充実している。これに対して、一般名主層は農具と武具の所有が豊富である。そして、小百姓層は生活や労働に必要な最少限の資財しか所有していないことが知られるのである。また、これらの階層を支配する在地領主については、自己の資財中に農具をほとんど持たず、稲穀、銭貨の蓄積を決定的な条件としていたとされている。

このように中世における基本的な村落構造は、領主の支配のもと実質的に耕作を掌握する名主層があり、その下に実働にあたる小百姓層があったという形態が窺える。

以上の基礎的な認識に立脚して本墓地の造営者について考えよう。

本墓地より窺える経済的事象は次の如くである。

1　約10m四方の土地を墓域として永久的に占有する。2　継起的な石塔の造立。3　珠洲・加賀・越前・瀬戸などの陶器の入手。

これらの条件を満たしうる階層[39]は、領主層と有力な名主層に限定されよう。

領主層の墓地と考えられている遺跡に、倉光ゴキヤマ遺跡[40]がある。同遺跡は現在の松任市倉光町に所在し、五輪塔・寶篋印塔あわせて20点以上と蔵骨器とみられる鎌倉時代後期の珠洲陶器甕・瀬戸陶器の三耳壺などが出土している。『寶永誌』『越登賀三州志』『石川訪古遊記』には倉光氏の居館について、倉光村の東端の御器山(ごきやま)にあったと伝えており、同遺跡の場所と一致する。また、大正年間にはその形をとどめていたといわれるが、その後の耕地整理によって失なわれている。

倉光ゴキヤマ遺跡を倉光氏の墓地とみると、領主層の墓地はその本領地に営まれたと考えることが可能である。したがって、倉光、安吉両保より離れた劔崎の地に領主層の墓地が営まれる必然性は見いだしがたい。

これらのことより、本墓地の被葬者層を、村落にあって実質的な農業経営を掌握していた有力

名主層と考えることが妥当であると思われる。

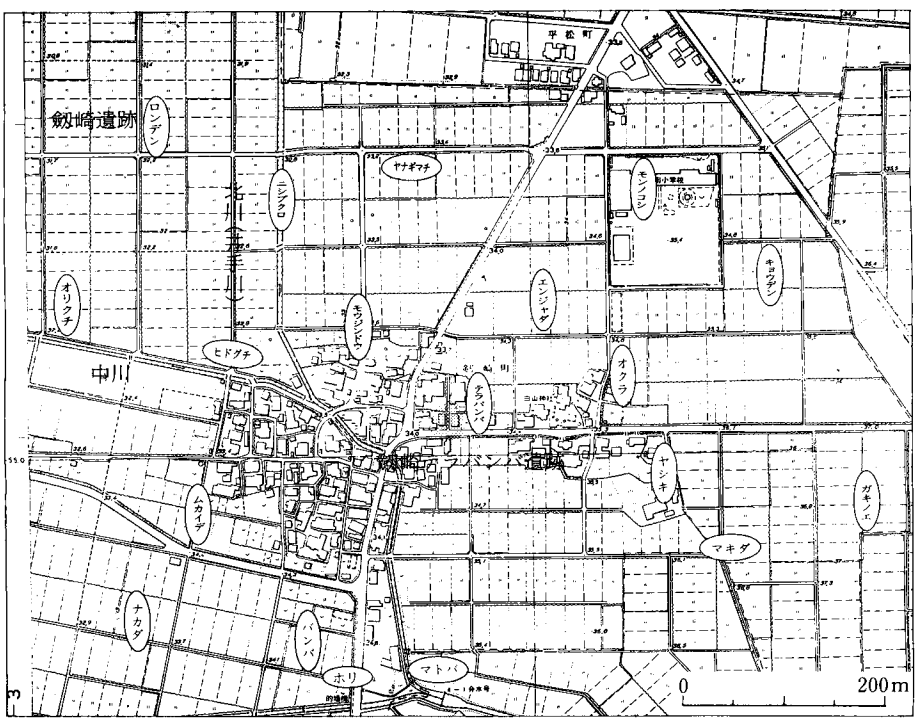
それではこの名主層の信仰や宗教意識の実態はどうであったのか。本墓地造営時にはすでに鎌倉新仏教が広く流布している。しかし、村落における信仰形態は必ずしもこれに影響されたものではなかったようである(41)。当時の村落における百姓層の信仰の対象として村堂がある。その信仰対象はさまざまで、観音・薬師・地蔵・昆沙門・不動・大日・阿弥陀・弥勒など特定の仏・菩薩を祀ってきたようである。そして、これは名主層を中心とする上層農民の結衆によって支えられていたと浅香年木は指摘されている(42)。村堂の役割については、日常生活(現世)の安定を願う祈禱堂的な目的を果していたのではないかとする見方(43)もある。

まぎれもなく埋葬の地であった本墓地は、その中央に、共に葬られるべき土坑が穿たれており、その上部をはじめ周囲に、墓碑および供養碑としての目的を担った五輪塔・寶篋印塔が次々に造立されたと推定される。ともに幽明界をいだき、累代性をおびた本墓地の機能的条件を満たしうる集団として、血縁的紐帯によって結ばれた家族的集団を想定できる。したがって、本墓地は有力名主層の家族墓(44)として捉えることが可能であろう。

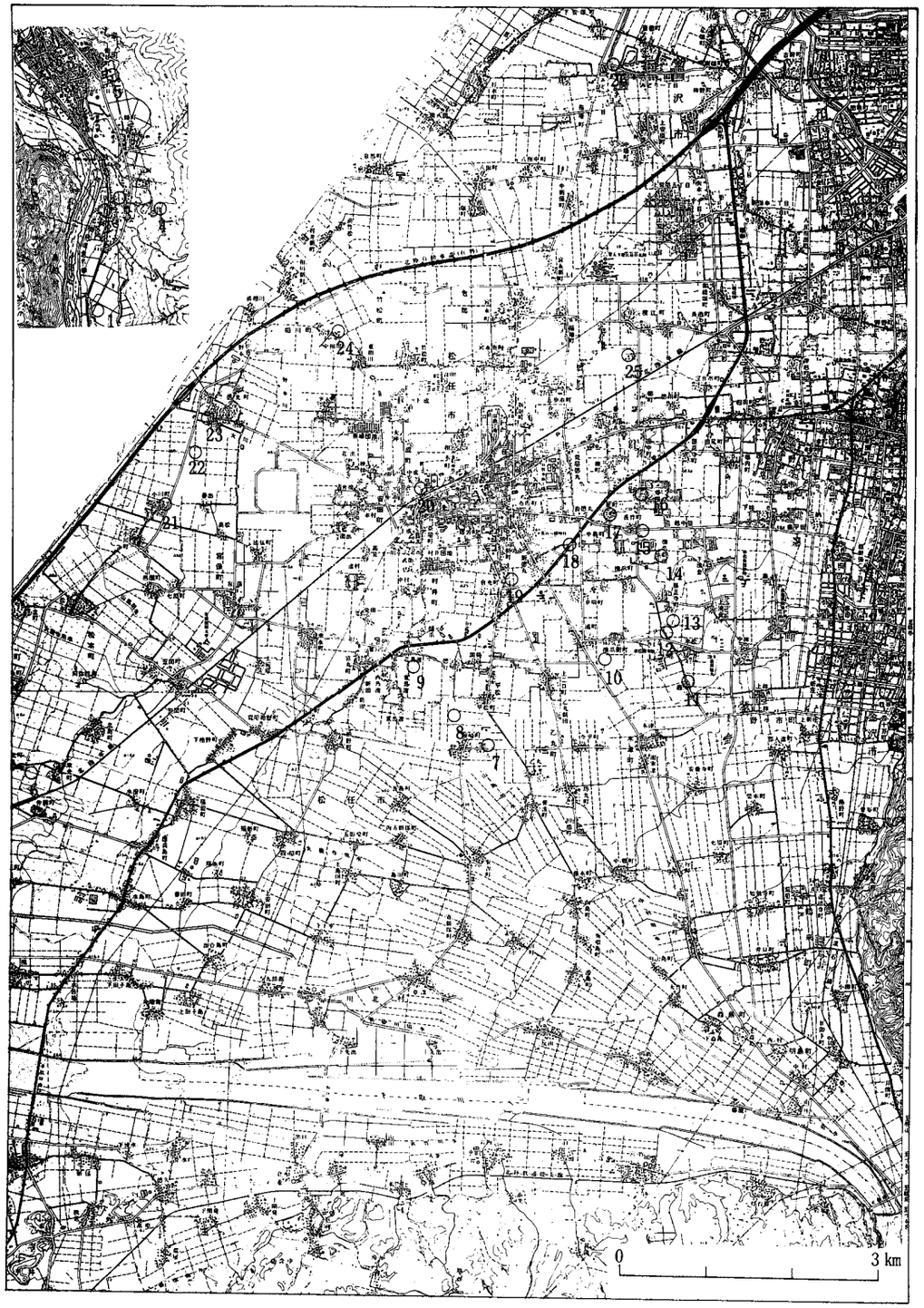
上述の、有力名主層と推定される本墓地の被葬者についてはその名を知る資料はない。ただ、近世の文献である『郷村名義抄』の石川郡の条に次のような記事がある。

劔崎土佐なる豪士ありて武威を振ふ　その的場の跡今にあり　後其処に家居して地名を劔崎と云ふ。

また、『寶永誌』にも類似の記事があり、劔崎土佐なる者が劔崎の地に居住したとの文献を知り



第19図　劔崎周辺の小字名（『林中のうつりかわり』より）　1/7,500



第20図　手取扇状地における石塔出土遺跡分布図　　1/75,000

第4表　手取扇状地における石塔出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	現況	出土石塔	伴出遺物	備考
1	白山町墳墓跡(Ⅰ)	鶴来町白山町	畑地	五輪塔・寶塔4点		
2	白山町墳墓跡(Ⅱ)	〃　〃	〃	五輪塔	珠洲陶器	
3	浄養寺墓地	〃　〃	墓地	五輪塔		在銘地輪あり 搬入か
4	三宮墓山遺跡	〃　三宮町	山林	五輪塔		
5	日吉町墳墓跡	〃　日吉町	畑地	五輪塔		
6	米光万福寺遺跡	松任市米光町	水田	五輪塔・寶篋印塔	珠洲・加賀・越前陶器	
7	劔崎テラバンバ遺跡	〃　劔崎町	宅地	五輪塔・寶篋印塔 17点		御宮白山神社境内にあり
8	劔崎遺跡	〃　〃	水田	五輪塔・寶篋印塔		
9	延寿寺遺跡	〃　村井町	〃	五輪塔		
10	三浦高麗野遺跡	〃　三浦町	宅地	五輪塔・寶篋印塔 50余基		
11	法福寺跡	野々市町末松	水田	五輪塔・寶篋印塔		末松神社境内にあり
12	ダイカン遺跡	〃　〃	〃	五輪塔・寶篋印塔		〃
13	福正寺跡	〃　〃	〃	五輪塔・寶篋印塔		
14	橋爪松の木遺跡	松任市橋爪町	〃	五輪塔・寶篋印塔 とも数基		橋爪地蔵堂にあり
15	長竹遺跡	〃　〃	〃	五輪塔		
16	専福寺跡	〃　専福寺町	社地	五輪塔	銅器、花器	
17	高田家墓地	〃　乾町	墓地	五輪塔		
18	西方寺跡	〃　幸明町	〃	五輪塔数基	一字一石経	幸明町共同墓地にあり
19	倉光ゴキヤマ遺跡	〃　倉光町	〃	五輪塔・寶篋印塔 22点	珠洲・瀬戸・越前陶器	石塔は倉光日吉神社境内
20	出城城跡	〃　成町	城跡	寶篋印塔		
21	小川小白山社遺跡	〃　小川町	社地	五輪塔・寶篋印塔		搬入か
22	聖興寺跡	〃　徳光町	水田	五輪塔		
23	徳光館跡	〃　〃	〃	五輪塔		八坂神社にあり
24	相川館跡	〃　相川町	社地	五輪塔		
25	ゴクラク寺跡	〃　横江町	水田	五輪塔		
26	下水処理場遺跡	金沢市中屋町	処理場	五輪塔	灯明皿	

うる。上田永吉氏の採集された小字名[45]（第19図）によると「ヤシキ」「オクラ」「ホリ」「マトバ」などがあり、近世に伝える劔崎土佐の伝承とあわせて興味深いものがある。

第21図　劔崎テラバンバ遺跡出土五輪塔火輪

最後に、手取扇状地扇央部における石塔分布をみてみよう。

『石川県遺跡地図』をもとに知りうる遺跡は26ケ所を数える。その分布は扇頂部[46]・扇央部・扇端部の三地域に大別できる。扇頂部では鶴来町の白山比咩（しらやまひめ）神社周辺にあり、ここで特徴的なことは県内における紀年銘五輪塔9基のうち4基[47]が存在するということである。その評価については中西国男氏の論考[48]に詳しいのでここでは触れないが、白山比咩神社の存在と不可分の関係にあった階層の墓であったことは想像にかたくない。また、扇央部におけるあり方は、松任市倉光町を中心とした半径2kmの圏内に集中する傾向がみられる。さらに、本遺跡をはじめ、倉光ゴキヤマ遺跡、三浦高麗野遺跡などで多量の点数が出土しているのも注目すべき傾向である。扇端部の分布は散在的である。

以上のうち発掘調査を経たものは本遺跡と白山町墳墓遺跡のみであり、他は耕地整理をはじめとする不時の発見によるものである。今後は、詳細な時期的検討や材質の同定を行ない、文献史学の成果とも併せて、被葬者層の実態に迫る必要があろう。

本書の作成にあたっては多くの方々の学恩にあずかっている。

櫻井甚一先生には全体にわたって適切なご指導をいただいた。唐川明史氏には石造遺物についてご教示をいただいた。文献史学の立場からは東四柳史明・伊林永幸・室山　孝の各氏より、中世村落における階層構成や信仰の問題についてご教示いただいた。そして、同僚の垣内光次郎主事には、基本的な文献の提供をうけ、遺物や遺構の評価について終始ご教示いただいた。山本直人主事には石造遺物の材質同定をお願いした。

以上、多用のなかご援助を惜しまれなかった各氏に心より感謝したい。

註

(1)　櫻井甚一・唐川明史「地頭町中世墳墓窟」『富来町史』続資料編　富来町役場　1976　石川県富来町。

(2)　昭和52年石川県教育委員会が調査。平田天秋氏のご教示による。

(3)　西野秀和「中島町マンダラ中世墓群をめぐって」『日本城郭大系』7　新潟・富山・石川　新人物往来社　1980　東京。

(4)　土肥富士夫編『細口源田山遺跡』　七尾市教育委員会　1982　七尾。

(5)　高堀勝喜・荒木繁行・福田弘光・吉岡康暢・櫻井甚一・浅香年木『普正寺』　石川考古学研究会　1970　金沢。

(6)　西野秀和・浅田耕治『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1981　金沢。　西野秀和・垣内光次郎編『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡』（II）　石川県立埋蔵文化財センター　1985　金沢。

(7)　滝上秀明『辰口町湯屋チョウヅカ遺跡』　辰口町教育委員会　1985　石川県辰口町。

(8)　室山　孝・小村　茂『軽海中世墓址群』　小松市教育委員会　1973　小松。

(9)　西野秀和註(3)文献。垣内光次郎「各府県の様相　石川県」『古代・中世の墳墓について』　1983　埋蔵文化財研究会　福岡。

(10) 櫻井甚一『石川縣銘文集成』中世金石文編　135～136頁　北国出版社　1971　金沢。

(11) 前掲註(1)・(5)文献。

(12) 谷内碩央・土肥富士夫・櫻井甚一『丹治山福水寺遺跡』　羽咋市教育委員会　1982　羽咋。

(13) a　松本健郎・野田拓治『上の原遺跡』II　熊本県教育委員会　1984　熊本。

b　柳田康雄編『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集　福岡県教育委員会　1971　福岡。

c　橋口達也・副島邦弘編『干潟遺跡』I　福岡県教育委員会　1980　福岡。

d　岩永哲夫・北郷泰道編『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報』(II)　宮崎県教育委員会　宮崎。

e　森田　勉・馬田弘稔『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXXI　福岡県教育委員会　1979　福岡。

f　橋本　正・岸本雅敏・山本正敏『富山県朝日町柳田遺跡・柳田古墓緊急発掘調査概報』　富山県教育委員会　1975　富山。

g　橋本　正『小杉町上野遺跡』—記録写真集—　富山県教育委員会　1974　富山。

h　吉野義照「上野古墓」『上野平遺跡発掘調査報告書』　京都府教育委員会　1973　京都。

i　木下召乙『朝日山古墳群第46号墳発掘調査報告書』　朝日町教育委員会　1982　福井県朝日町。

j　隈　昭志・野田拓治編『尾窪』　熊本県教育委員会　1973　熊本。

k　木村泰彦「右京第130次（7ANKC地区）調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』　昭和58年度　長岡京市埋蔵文化財センター　1984　長岡京。

l　小玉道明・山沢義貴・谷本鋭次「東庄内B遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』　三重県教育委員会　1970　津。

この他に石川県内では金沢市塚崎遺跡でL字状の溝が3基重複して検出されている。小嶋芳孝氏のご教示によると、上部が削平されていて不明であるが、本来は方形の周溝をもった中世墓であった可能性があるという。また、これに接して2基の中世土壙墓も検出されている。

(14) 関　清・藤田富士夫『富山市杉谷（A・G・H）遺跡発掘調査報告書』　富山市教育委員会　1975　富山。

(15) 註(13)b文献の鏡原遺跡では周溝内より多数の石が検出されたことより、捨暗渠に利用されたものと考えられている。

(16) 封土の存在がすなわち標識であるとはいえないように思う。その高さや、塔婆の有無によって標識的機能の付与される対象が異なった可能性もある。

(17) 斎藤　忠『日本史小百科　墳墓』　200～201頁　近藤出版社　1978　東京。　楠元哲夫「中世後半期における集団墓地—とくにその生成と展開をめぐって」『末永先生米寿記念献呈論文集』　1123頁　末永先生米寿記念会　1985　橿原。

(18) 註(17)の斎藤1978文献に同じ。

(19) 註(13)に掲げた文献の他に次の文献に接することができた。小稿の分類のなかで捉えられない例もあり、分類の基準の再考とともに各地域での資料の集積の必要性を痛感する。

川崎利夫「山形県における古代・中世の火葬墓について」『東北考古学の諸問題』東北考古学会　1976　東出版寧楽社　東京。　斉藤吉弘「日光山遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』V　1981　宮城県教育委員会　仙台。　石川長喜「発掘調査された墳墓について」『紀要』III　岩手県立埋蔵文化財センター　1983　岩手県都南村。

(20)櫻井甚一「中世墓地の石造遺物」『普正寺』　石川考古学研究会　1970　金沢。　櫻井甚一「五輪塔と寶篋印塔」『丹治山福水寺遺跡』　羽咋市教育委員会　1982　羽咋。

(21) 日野一郎「石塔」『新版仏教考古学講座』第三巻　塔・塔婆　47頁　雄山閣　1976　東京。

(22) 大三輪龍彦・小川裕久他『重要文化財 浄光明寺五輪塔修理工事報告書』　浄光明寺　1976　東京。

(23) 米林勝二「山代地区における仏教美術について」『やましろ』　480～486頁　山代公民館　1958　加賀。　米林勝二「薬王院五輪塔」『石川県の文化財』　石川県教育委員会　1985　金沢。なお、第18図に示した図はこの二つの文献より作成した略図である。

(24) 櫻井甚一「歴史考古資料」『能都町史』第三巻　歴史編　242・336～338頁　能都町役場　1982　石川県能都町。

(25) 註(5)文献に同じ。15世紀前半を中心におこった安原砂丘の移動によって被覆した墓地である。空風輪は転落していたが火輪以下は組み合わされた状態で出土した。資料は現在石川県立郷土資料館に保管されており、実見にあたって同館学藝員の戸澗幹夫氏のお世話にあずかった。深謝したい。なお、図は櫻井甚一氏の計測値および報告書の写真より筆者が作成した略図である。

(26) 註(5)文献に同じ。

(27) 劔崎町の御宮白山神社境内に搬入されている。他に五輪塔の地輪3点、火輪6点、空風輪2点、寶篋印塔の笠と相輪が各1点、台座が3点ある。明らかに近世の所産とみられるものも含んでいる。

(28) 註(1)文献に同じ。塔は墳墓窟に1基ずつ納入されていた。

(29) 唐川明史、垣内光次郎両氏が作成された実測図をご厚意により実見した。図は実測図をもとに作成した略図である。

(30) 吉岡康暢「加賀・珠洲」『世界陶磁全集』3　日本中世　小学館　1977　東京。

(31) 酒井重洋・岡本恭一・竹越善和『藪田薬師中世墓発掘調査報告書』　氷見市教育委員会　1985　氷見。やぐら状の横穴中より出土したもので、法量的な検討によりその組み合せが間違いないとされるものである。

(32) 中央塔の火輪の軒口がななめに切れており、空風輪も縦長のきざしをみせる。水輪の最大径は下位にあり、他の2塔と形状を異にする。これは天地逆の可能性がある。向って右塔は水輪の最大径を上位におく。火輪は軒下が水平で、軒口は垂直に切れる。空風輪は中央塔と近似する。左塔は地輪が横長で安定している。全高に占める比率は25%である。水輪は最大径を上位におく。火輪の軒口はほぼ垂直に近い形状で切れる。各塔とも総高130cm前後を測る。
本塔群の実見にあたって便をはかられた芝田　悟氏のご厚意に感謝したい。

(33) 寶篋印塔のうち第18図の中央塔が石川県鹿島郡鹿島町の石動山遺跡五智院跡に所在する延徳（1489～1491年）の銘をもつ寶篋印塔基礎よりいくぶん後出的な位置におかれていることによる。また、伴出の土師質土器もその下限は15世紀代を降るものではないとのご教示を垣内光次郎氏よりうけた。

(34) 垣内光次郎氏は五輪塔の変遷を地輪の縦、横の法量の変化より追求されている。つまり、地輪の高さが幅に占める比率を比較する方法である。この比率が低ければ横長で安定しており、高ければ縦長で不安定な形状を示すということである。同氏の分析によると典型的五輪塔といわれる14世紀初頭の鎌倉所在塔群が66～71%の比率を示し、薬王院塔は91%、普正寺5号塔が84%、同1号塔が77%、地頭2号塔が74%、藪田薬師1号塔が83%、最安寺右塔（向って）が81%、鶴来町浄養寺の文明16年塔が66.6%、同白山町墳墓遺跡の永正18年塔が51%を示すという。14世紀初頭の塔を基準にするとその後は漸次縦長にむかい15世紀後半から16世紀前半にかけては、再び横長の形状にもどるという動きが窺えるということである。分析の結果をご教示いただいた垣内光次郎氏に深甚の謝意を表したい。櫻井甚一氏によると、地輪は近世初期に縦に長くなるものがあらわれるということである。また、同氏は五輪塔の形状は同時代においても造立者の力の差などにより違いをみせることがあり、地輪によって変遷を窺うためには更に資料の検討を重ねる必要があるとのご教示を与えられた。

(35) 石川県立図書館加能史料編纂室東四柳史明・室山　孝両氏の御教示による。

(36) 東四柳史明「中世加賀・能登の争乱」『加賀 能登の歴史』　107～110頁　講談社　1978　東京。

(37) 浅香年木「平安期における手取扇状地の開発と領主」『加賀三浦遺跡の研究』　121頁　石川県教育委員会・松任町教育委員会　1967　金沢。

(38) 黒田日出男「中世農業技術の様相」『講座　日本技術の社会史』第一巻　農業・農産加工　日本評論社　1983　東京。

(39) 僧侶層も造塔をなしえた階層である。しかしながら本遺跡の石造遺物以外の遺物に宗教性を帯びたものはなく、周辺においてもそれに関する遺跡の存在は確認できない。また、本遺跡が共葬的墓地であり、継起性を窺わせるものであることから、単独で造立されることの多い僧侶の墓地とは考えがたいのである。

(40) 倉光町の倉光日吉神社に石塔が搬入されている。その内訳は、五輪が組み合わされたもの1基、地輪1点、水輪7点、火輪3点、空風輪2点、寶篋印塔の笠1点、部分不明のもの3点である。組み合わされた五輪塔の地輪は大型である。

(41) 浅香年木「中世における地方寺院と村堂（上）」『北陸史学』第二十一号　北陸史学会　1972　金沢。　浅香年木「中世における地方寺院と村堂（下）」『北陸史学』第二十二号　北陸史学会　1973　金沢。

(42) 註(41)の浅香1973論文の44頁。

(43) 赤田光男「村落社会における仏堂の形態と機能について(1)」『文化史学』　第26号　64頁　文化史学会　1971　京都。

(44) 地域における同族集団の墓地と考えられている遺跡に上町マンダラ中世墳墓群がある。注(3)文献。同遺跡では丘陵の先端部に堀切を入れて25×24mの墓域を設定し、径約5m、高さ約1mの塚を中心に40基以上の中世墓が配置されていた。

(45) 中野辰一編『林中のうつりかわり』—上田永吉先生遺稿—　林中村誌編纂委員会　1970　石川県松任町。

(46) 扇頂部は鶴来町本町の北陸鉄道鶴来駅付近とされており、厳密にいえば鶴来町における5ケ所の分布は低位段丘面での立地となる。

(47) 註(10)の櫻井1971文献および注(6)西野・垣内編1985文献。両文献に鶴来町の資料が計4点収載されており、他の1点については垣内光次郎氏より、辰口町岩本中世墓出土の文明18年銘塔が辰口町立博物館に保管されているとのご教示をうけた。

(48) 中西国男「白山本宮と白山町墳墓遺跡」『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡』（II）　石川県立埋蔵文化財センター　1985　金沢。

参考文献（五十音順）

石田茂作監修『新版 仏教考古学講座』第三巻　塔・塔婆　雄山閣　1976　東京。
石田茂作監修『新版 仏教考古学講座』第七巻　墳墓　雄山閣　1975　東京。
一ノ宮郷土誌編集委員会編『一ノ宮郷土誌』　一ノ宮公民館　1983　石川県鶴来町。
川北村誌編さん委員会編『川北村誌』　川北村役場　1970　石川県川北村。
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター編『古代・中世の墳墓について』　埋蔵文化財研究会　1983　福岡。
中奥村誌編集委員会『石川県中奥村誌』　松任市中奥公民館　1972　松任。
貫　達人編『鎌倉の五輪塔』　鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館　1977　鎌倉。
森　浩一編『墓地』　社会思想社　1975　東京。
山島郷土誌編集委員会『山島郷土誌』　山島公民館　1980　松任。

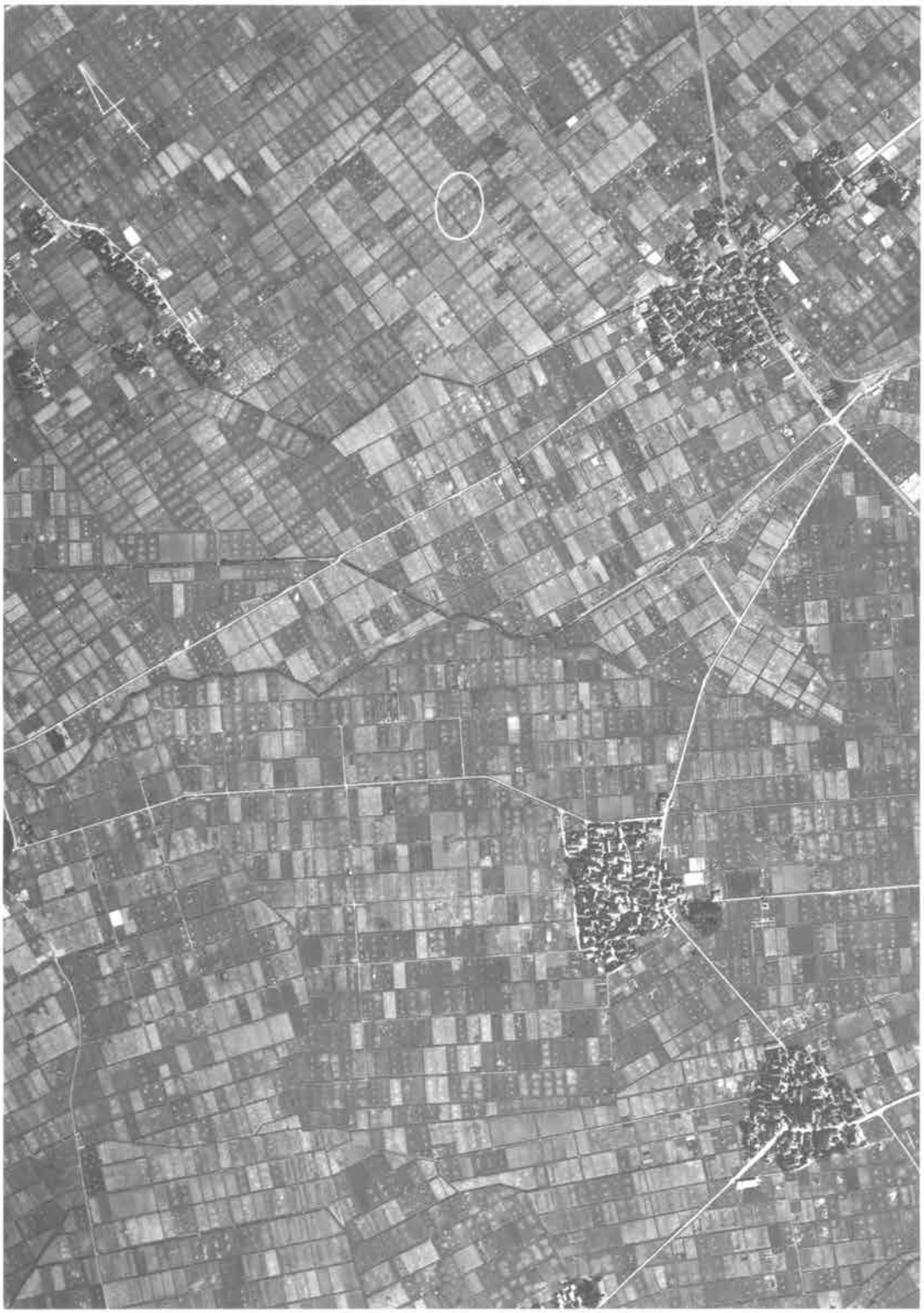
追　記

脱稿後に鳥取県妻波古墓の報告書を知った。同墓は、中世末期に営まれ、方形の周溝および墳丘をもち、二度の拡張によって個人墓から集団墓的性格への変容をとげると推論されている。墳丘には100点におよぶ五輪塔の造立がみられ、「詣り墓」的性格とともに納骨場としての機能も併せもった墓と考えられている。また、同書中に関連遺跡として引用されている「西干目古墳」は本遺跡の墓地と同じく方形の周溝の一部が切れる形状を呈し注目されるが、『西干目古墳発掘調査報告』では6世紀代の古墳とされている。

妻波古墓の存在は本遺跡の墓地の評価に重要な関連をもつと思われるが、増加する類例ともあわせてその検討は後日に期したい。

植野浩三編『妻波古墓』　大栄町教育委員会　1985　鳥取県大栄町。
馬渕義則・原田雅彦『西干目古墳発掘調査報告』　大栄町教育委員会　1979　鳥取県大栄町。

図　　版



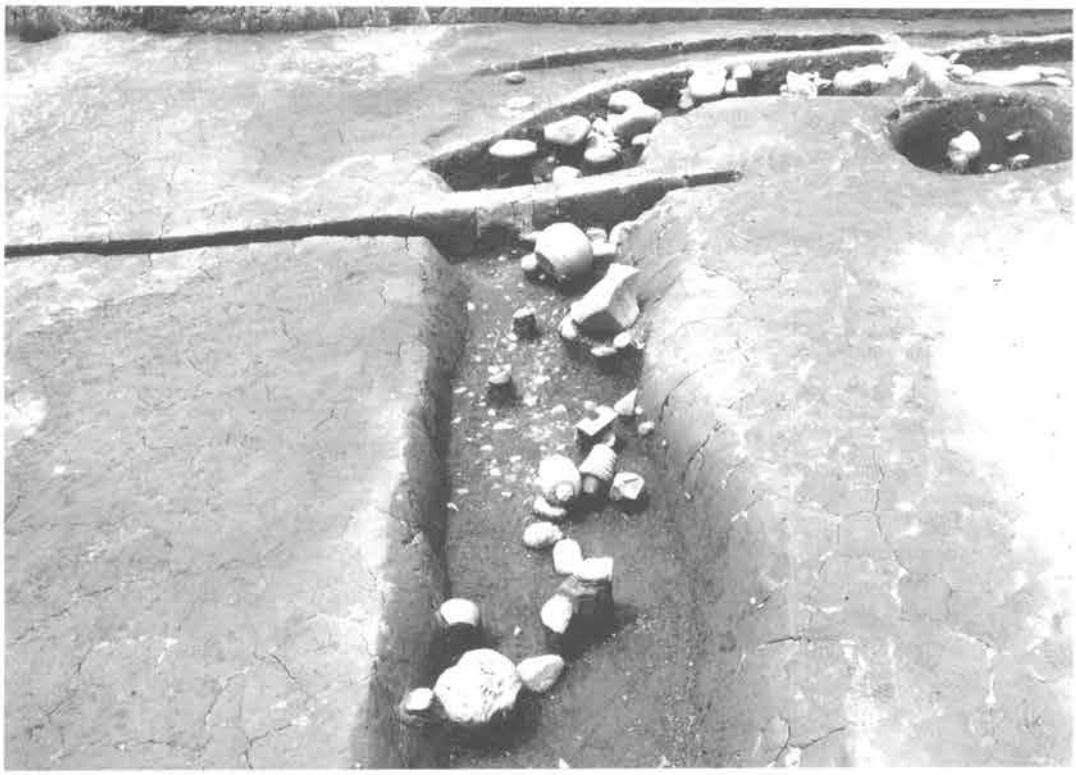
叙崎遺跡（○印）と周辺地域　(1/10,000)

(1)　調査前の遺跡全景（北から）

(2)　調査風景（北から）

(1)　墓地跡全景（南から）

(2)　墓地跡全景（北から）

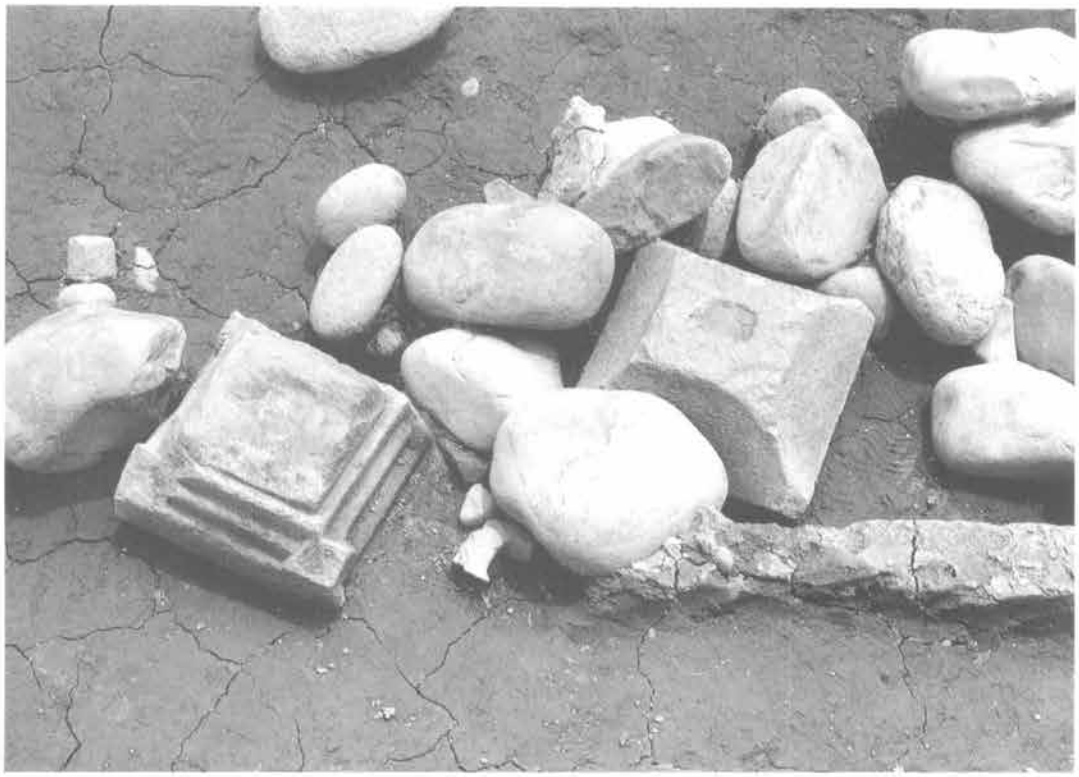


(1)　墓地跡南溝（東から）

(2)　墓地跡西溝（北から）

(1)　墓地跡北溝（東から）

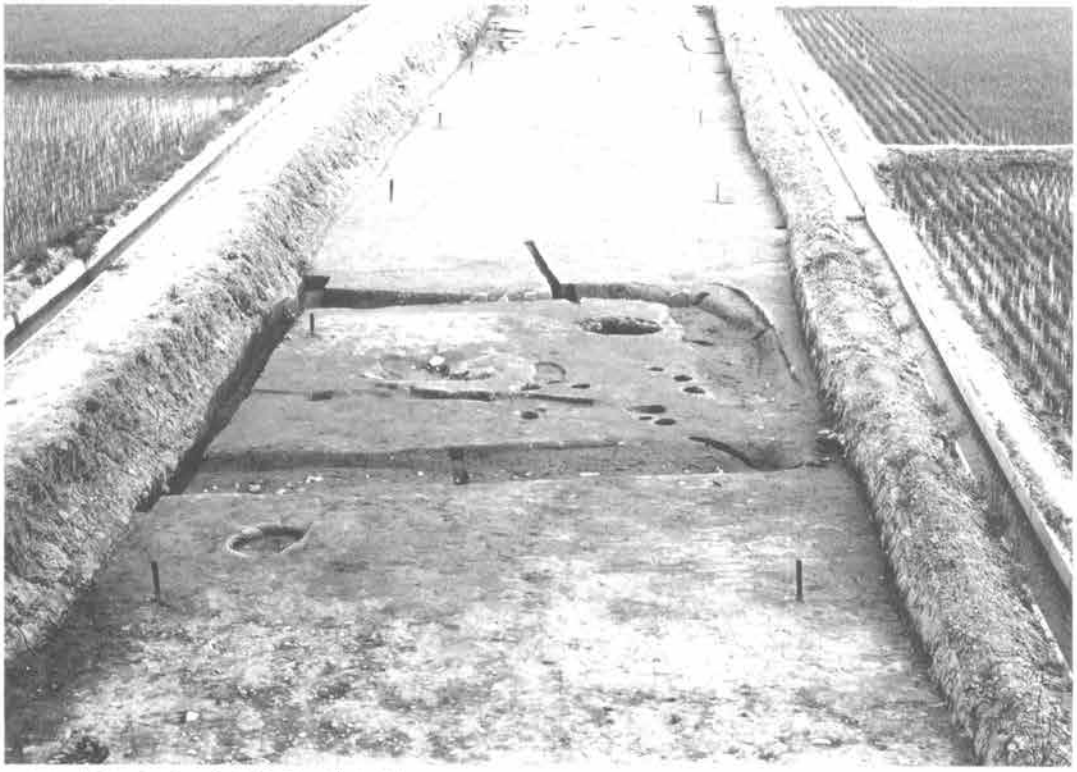
(2)　墓地跡土坑と第１号溝（東から）



(1)　墓地跡西溝の石造遺物出土状況

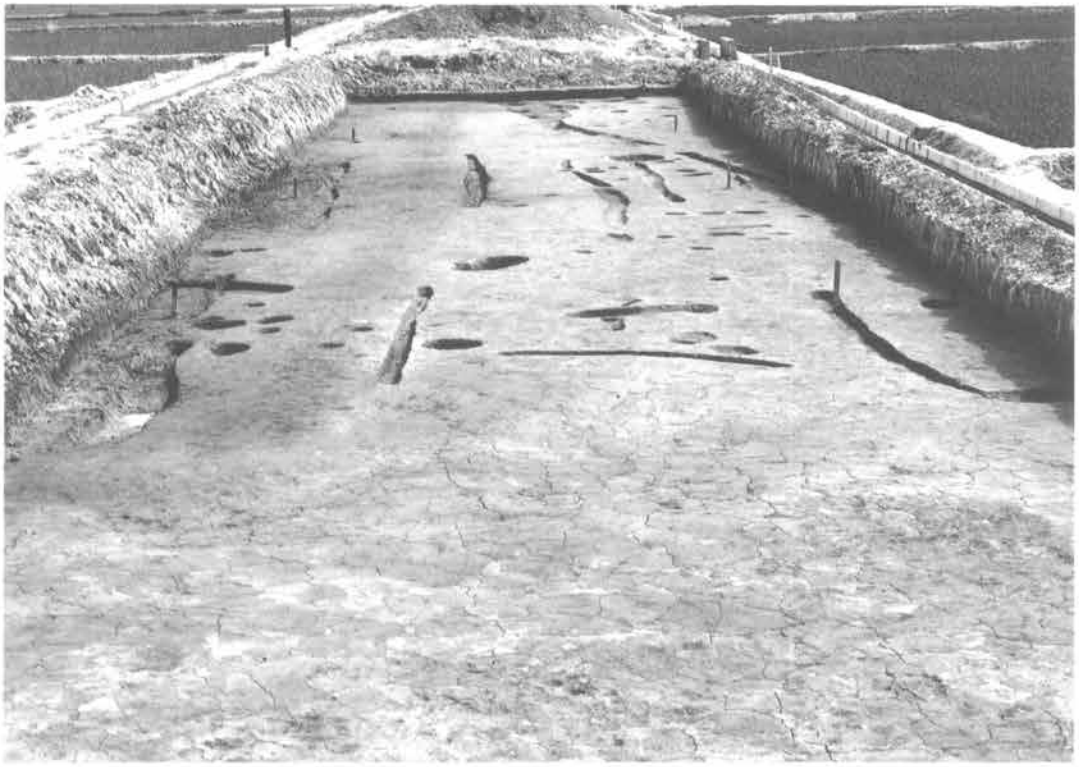
(2)　墓地跡南溝の層序（西から）

(1)　掘りあがった墓地跡（南から）



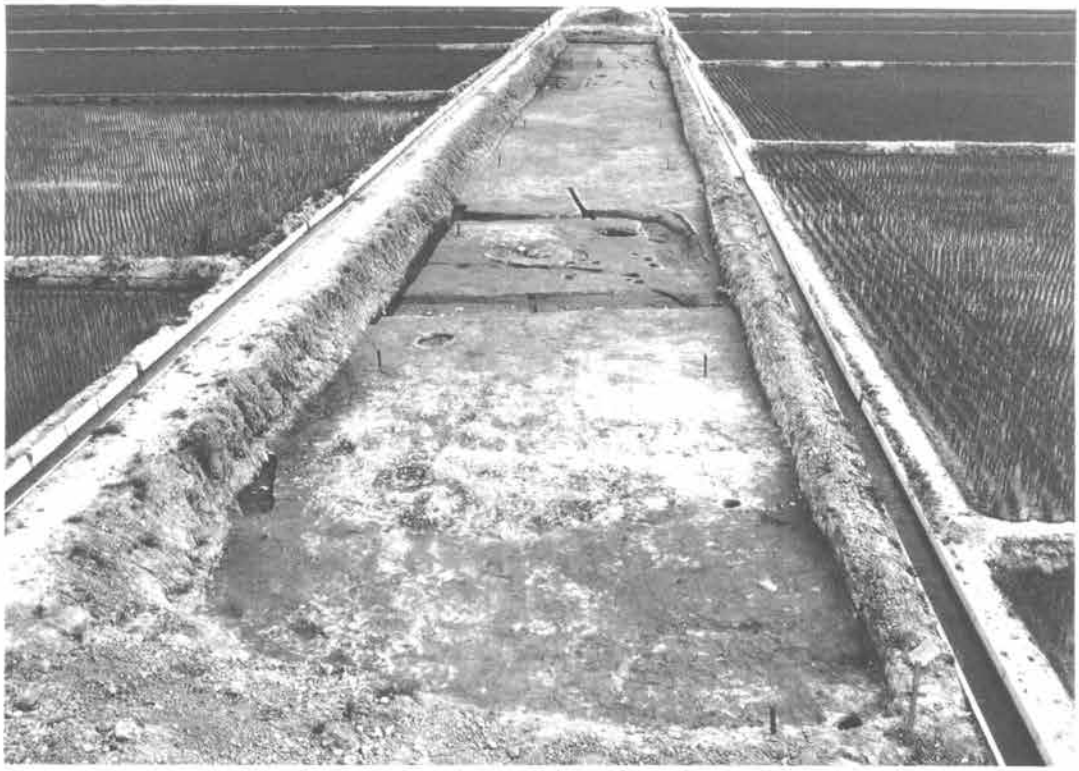
(2)　掘りあがった墓地跡（北から）

(1)　B区～E区遺構検出状況（南から）

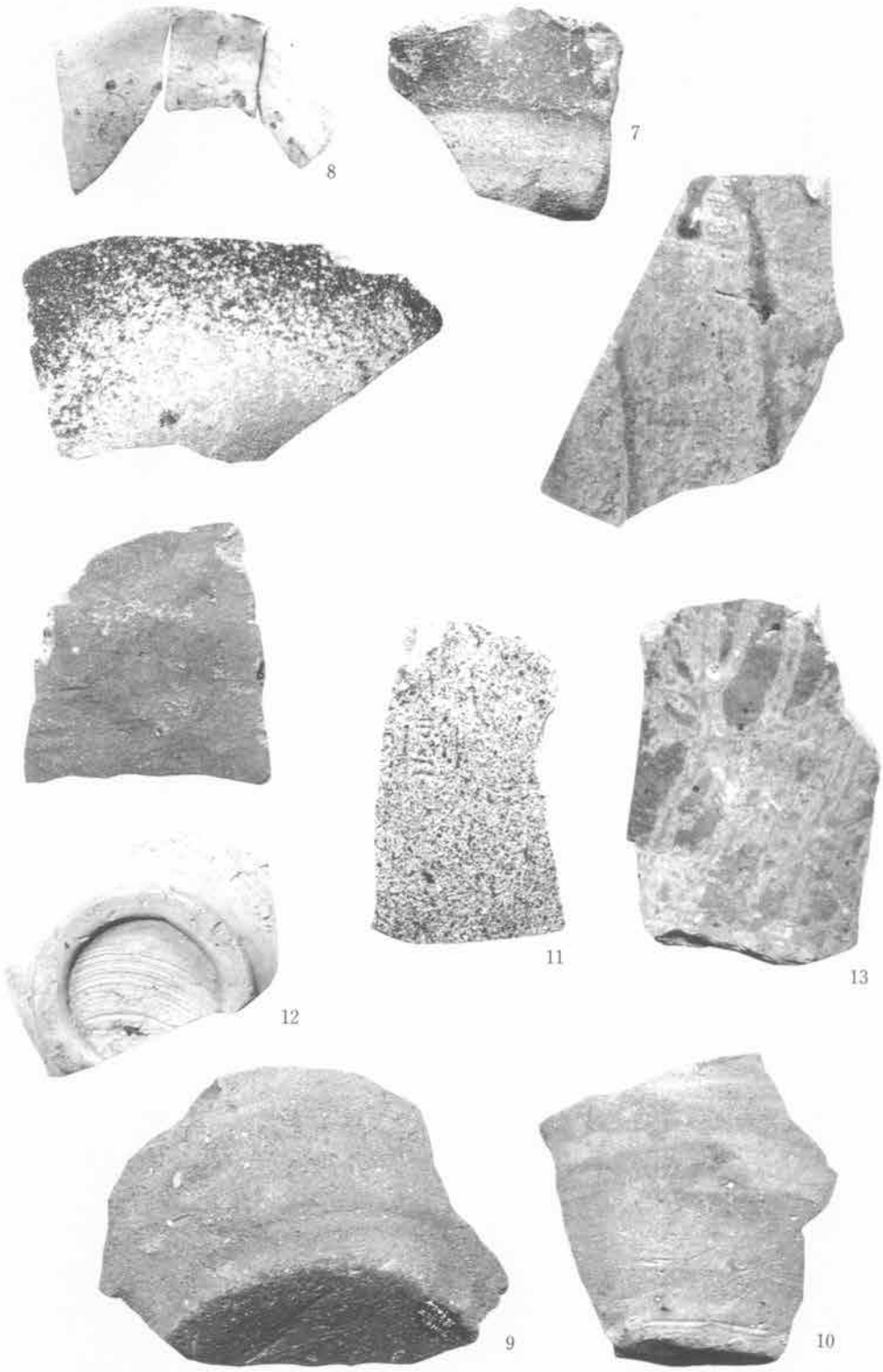


(2)　B区～E区遺構検出状況（北から）

(1)　第１号土坑

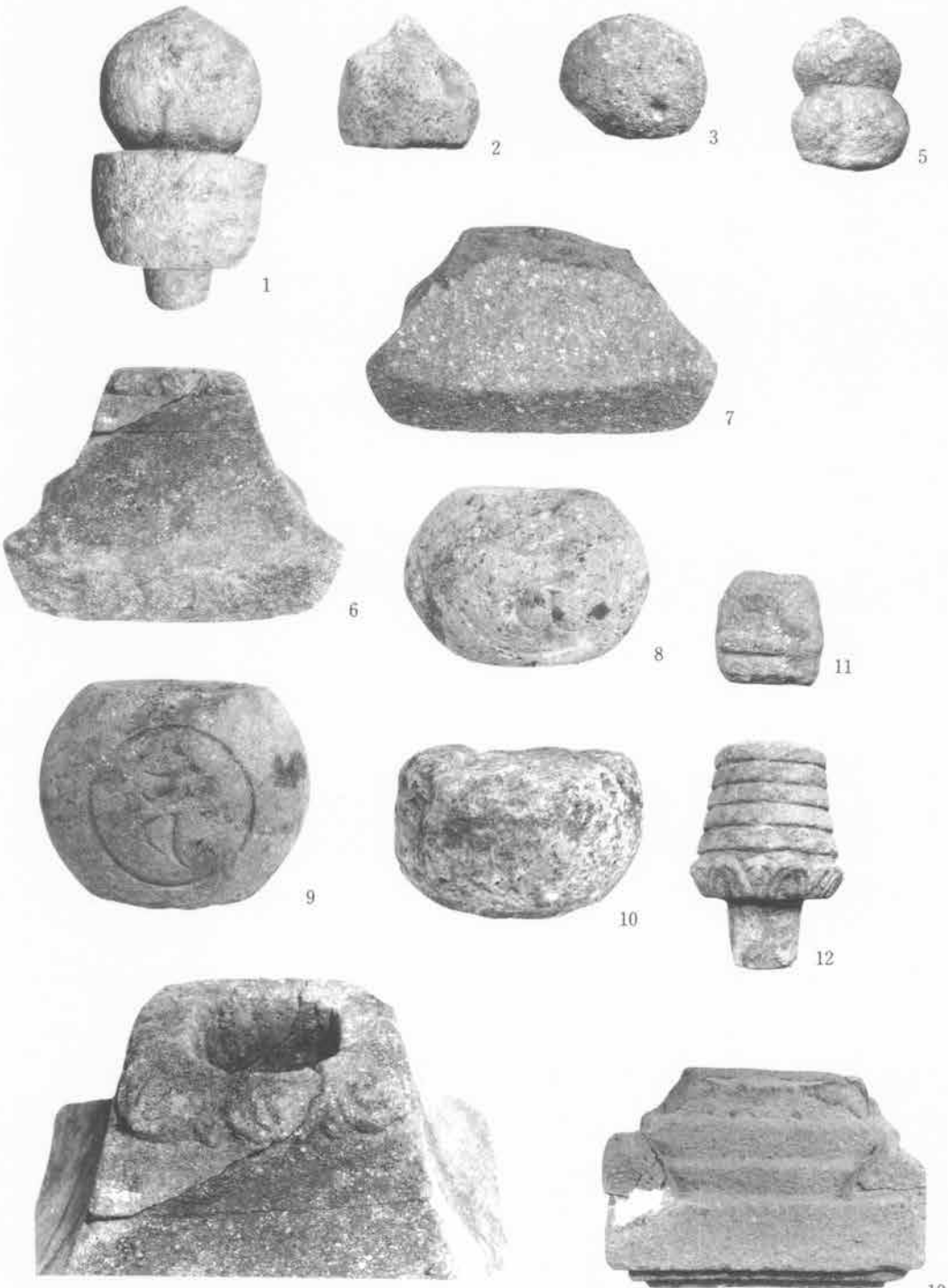


(2)　調査終了後の遺跡全景（北から）



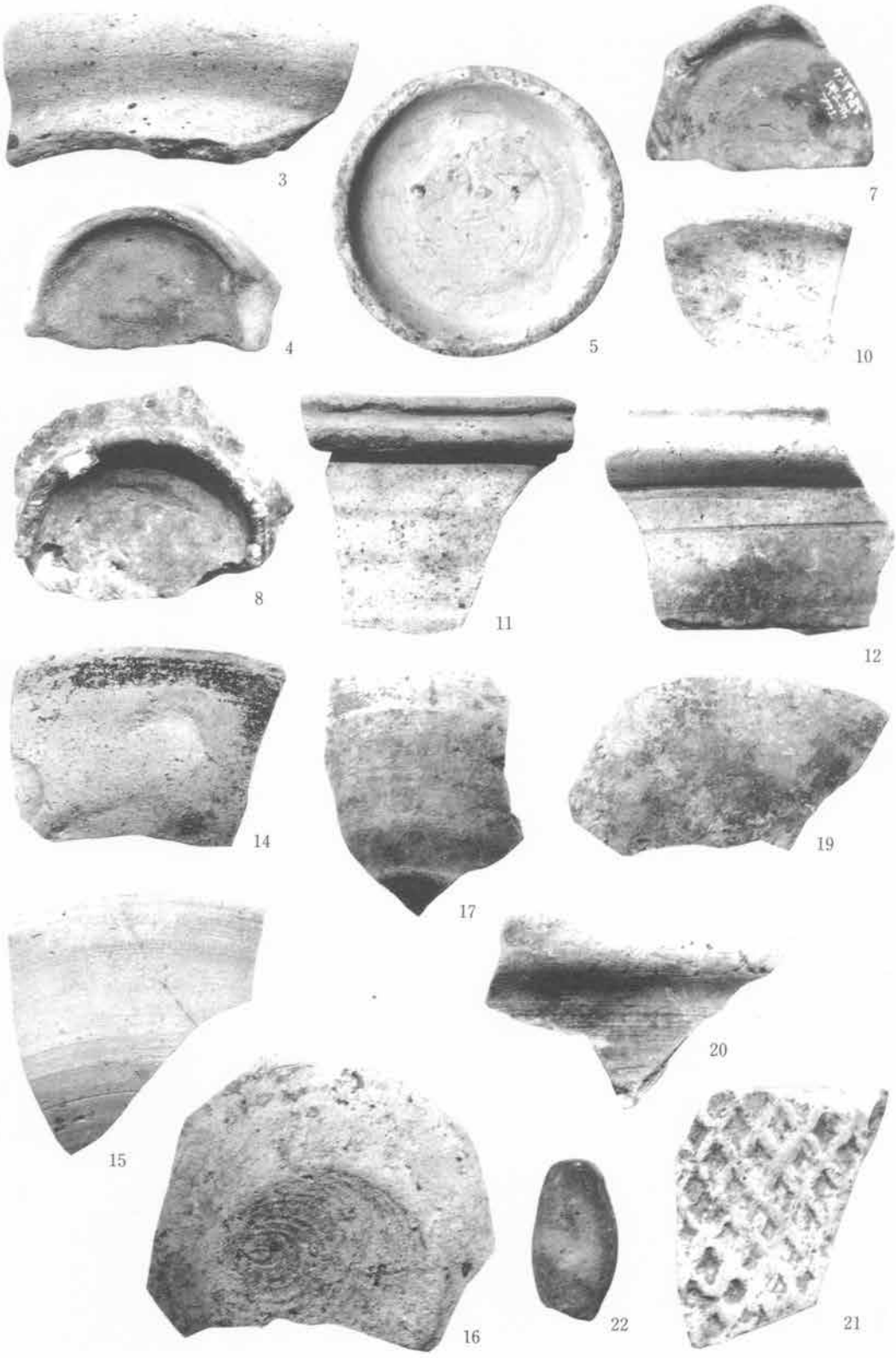
墓地跡出土土器

8・12は1/2、他は1/3



6の上部拡大

墓地跡出土石造遺物



土坑・溝・ピット出土遺物　1/2

図版第一三　遺物

包含層出土土器

1/2

KENZAKI SITE

The report of the excavation of the site at Kenzaki, Mattō City Ishikawa Prefecture

Kanazawa, 1986

Edited and Published by the Archaeological Research Center of Ishikawa Prefecture, JAPAN

劔　崎　遺　跡

昭和61年3月20日　印刷
昭和61年3月31日　発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921　電話（0762）43－7692番(代)

印　　刷　中川大正印刷株式会社
石川県金沢市北安江町447番地2号

©石川県立埋蔵文化財センター　1986
本文用紙：書籍用紙イエロー（中性紙）72kg